

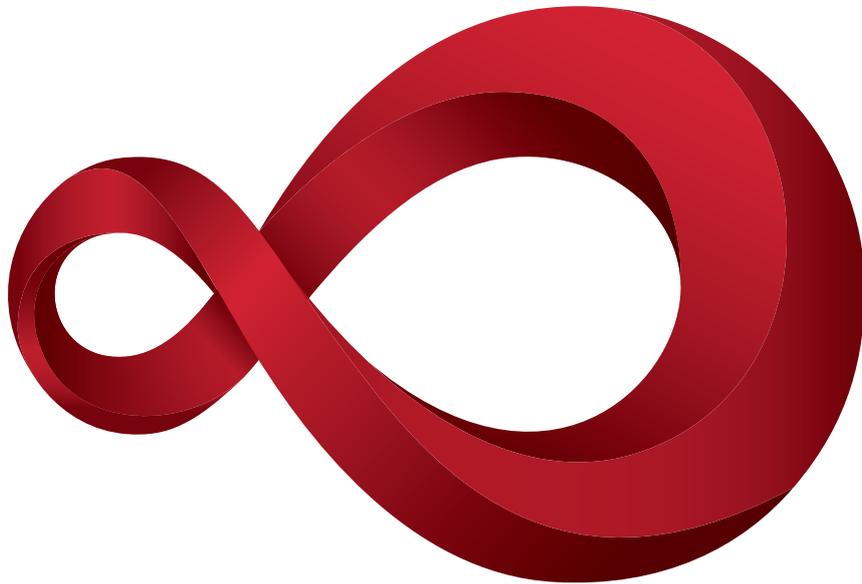
2020

KONAN UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

甲南大学大学院案内

人文科学研究科 / 自然科学研究科 / 社会科学研究科
フロンティアサイエンス研究科

見つかる、きみのなかの無限大。



KONAN INFINITY

CONTENTS

人文科学研究科

日本語日本文学専攻	04
英語英米文学専攻	06
応用社会学専攻	08
人間科学専攻	11

自然科学研究科

物理学専攻	14
化学専攻	16
生物学専攻	17
生命・機能科学専攻	18
知能情報学専攻	20

社会科学研究科

経済学専攻	24
経営学専攻	26

フロンティアサイエンス研究科

生命化学専攻	31
--------	----

支援体制&環境

研究所	33
研究活動の活性化	34
研究支援環境	35
資格取得	36
学位授与状況	36
大学院生の主な就職先	37
学費・諸費	37
奨学金・その他の支援制度	38
入学試験制度	39
入学試験結果	40
大学・大学院のあゆみ	41
アクセスガイド・大学院情報・各種お問い合わせ	

さらに深化する知識と創造性

甲南大学大学院 研究科・専攻・取得学位・入学定員

	修士課程	学位	入学定員	博士後期課程	学位	入学定員
人文科学研究科	日本語日本文学専攻	修士（文学）	5	日本語日本文学専攻	博士（文学）	2
	英語英米文学専攻	修士（文学）	6	英語英米文学専攻	博士（文学）	3
	応用社会学専攻	修士（社会学）	5	応用社会学専攻	博士（社会学）	2
	人間科学専攻	修士（文学）	10	人間科学専攻	博士（文学）	3
			計 26			計 10
自然科学研究科	物理学専攻	修士（理学）	12	物理学専攻	博士（理学）	3
	化学専攻	修士（理学）	12	生命・機能科学専攻	博士（理学）	3
	生物学専攻	修士（理学）	5			
	知能情報学専攻	修士（工学、理学または情報学）	6	知能情報学専攻	博士（工学、理学または情報学）	2
			計 35			計 8
社会科学研究科	経済学専攻	修士（経済学）	10	経営学専攻	博士（経営学）	3
	経営学専攻	修士（経営学）	10			
			計 20			計 3
フロンティアサイエンス研究科	生命化学専攻	修士（理工学）	10	生命化学専攻	博士（理工学）	1
						計 1

支援センター&研究所等

- | | | |
|---|--------------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> 人間科学研究所 | <input type="checkbox"/> カウンセリングセンター | <input type="checkbox"/> スポーツ・健康科学教育研究センター |
| <input type="checkbox"/> 先端生命工学研究所（FIBER） | <input type="checkbox"/> キャリアセンター | <input type="checkbox"/> 教職教育センター |
| <input type="checkbox"/> 公認心理師養成センター | <input type="checkbox"/> 国際交流センター | <input type="checkbox"/> 図書館・雑誌館・サイバーライブラリ |
| <input type="checkbox"/> 総合研究所 | <input type="checkbox"/> 国際言語文化センター | <input type="checkbox"/> フロンティア研究推進機構（甲南 FRONT） |
| <input type="checkbox"/> ビジネス・イノベーション研究所 | <input type="checkbox"/> 共通教育センター | <input type="checkbox"/> 教育学習支援センター |
| <input type="checkbox"/> 地域連携センター | | |

人文科学研究科

日本語日本文学専攻

- ・ 専門探究コース
- ・ 多元教養コース

英語英米文学専攻

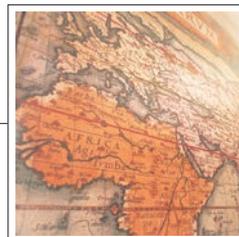
- ・ 専門探究コース
- ・ 多元教養コース

応用社会学専攻

- ・ 専門探究コース
- ・ 多元教養コース

人間科学専攻

- ▷ 環境・芸術・思想専修
 - ・ 専門探求コース
 - ・ 多元教養コース
- ▷ 心理臨床専修



人文科学研究科は、1964年に国文学専攻、英文学専攻、応用社会学専攻の修士課程が設置されました。3専攻の博士後期課程が1971年に、人間科学専攻の修士課程が1999年、博士後期課程が2001年にそれぞれ設置されました。

2013年には日本語日本文学専攻・英語英米文学専攻・応用社会学専攻の3専攻の修士課程に、また2016年には人間科学専攻 環境・芸術・思想専修の修士課程に「専門探究コース」と「多元教養コース」のコース制が敷かれました。「専門探究コース」では、専門を掘り下げることに重点を置き、研究職、教職、専門職につくための専門的研究を行います。「多元教養コース」では、生涯学習を目的とする人にも対応し、所属専攻の専門分野を基軸に、人文科学分野に広く目を向けた研究を行います。修士論文に代わる研究成果を提出することで学位が取得できるのもこのコースの特長です。また、人間科学専攻では、環境・芸術・思想専修と心理臨床専修の2専修制により、それぞれの専門性をいっそう高めています。

各専攻とも中学校と高等学校教諭の専修免許状が取得可能なほか、応用社会学専攻では専門社会調査士の資格取得への道が開けています。入試制度はコースごとにきめ細かい設定をしており、留学生をはじめ多様な人材を集めています。

各種研究会や紀要など発表機会、発表機関誌もあり、活発な研究活動を行っています。多くの修了者が研究職や教育職、その他の職業に就いて、高い社会的評価を獲得する活躍をしています。

日本語日本文学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

日本語学 日本文学

修士課程

博士後期課程

コース制

2013年度より新たにコース制を導入。「専門探究コース」では、専門分野を掘り下げることに重点をおいた研究、「多元教養コース」では、人文科学分野に広く目を向けた研究ができます。

専門探究コース

所属専攻の専門分野を中心に学習

専門科目

※専攻横断科目は8単位まで選択可能

修士論文

多元教養コース

所属専攻の専門分野を基軸に人文諸学を多元的に学習

専門科目

専攻横断科目
8単位以上
12単位まで履修

修士論文に代わる 成果物

(修士課程のみ。人間科学専攻心理臨床専修は除く。)

日本語・日本文学を幅広く研究する

日本語日本文学専攻は、1964年に国文学専攻として修士課程が開設されました。1971年には博士後期課程が増設され、研究と教育の両面において着実な歩みを続けてきましたが、世界の中の日本語、日本文学という視点を明確にするため、1995年に日本語日本文学専攻へと改称しました。日本語と日本文学に関する活発な研究が行われており、修士課程では、研究に関わる基礎的な能力の修得に、博士後期課程では自立した研究活動を行いうる能力の育成に重点をおいています。

学内外で活発な研究活動を展開

本専攻では、院生参加型の共同研究やワークショップの実施、また学外の研究会との交流も盛んで、学会での院生の研究発表も行われています。修士・博士後期課程の修了生は、中学校・高等学校・高等専門学校・短期大学・大学や日本語学校の教員として、またその他の職場で活躍しています。

特色

- 日本語学分野では、現代日本語の文法研究、方言等の社会言語学的調査研究、日本語教育に関連した実践的、理論的研究が行われています。
- 日本文学分野では、上代・中古・中世・近現代文学の研究や外国の文学・思想との比較研究を行っています。
- 学内推薦入学者・学外からの入学者・留学生など多様な学生を受け入れ、活発な議論をもとに研究が進められています。
- 大学院生の研究活動は、全国的な学会への参加や研究発表、学会誌への投稿など多岐にわたっており、「甲南大学紀要（文学編）」にも、博士後期課程の院生が研究成果を発表しています。
- 教職志望者のために、国語教育に関する科目「国語科教育特殊講義」、日本語教員志望者のために「日本語教育研究」が設けられています。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

日本語学

日本語学研究

教授 都染直也

兵庫県南東部地域で実施した地理言語学的調査によって作成した複数言語地図の統合作業と分析。関西から中国地方で実施した社会言語学的調査の結果をまとめた広域方言グロットグラム（地理年代言語図）を用いた方言の動態・動向分析。若者ことば・言語政策など現代日本語にみられる諸現象の社会言語学的観察・収集・分析。

教授 中島孝幸

日本語学・日本語教育。現代日本語文法の研究。外国人への日本語教育を視野に入れて、現代日本語文法を分かりやすく整理する。そのために、一方では「らしい」「ようだ」といった文法的類義表現に目を向け、一方では日本語学習者の中で割合の高い中国語話者が日本語を習得する上で問題点がどこにあるか日中対照研究を通し探っている。

日本文学

古典文学研究

教授 田中貴子

中世における文学と宗教の問題を中心として、注釈活動から説話が生まれるメカニズムと、それが中世文化全体に及ぼす影響を研究する。また、絵巻や絵入り本などの絵画表現から文学を考える。現在「文学」と呼ばれるものが必ずしも普遍的な価値観に裏付けられておらず、現代に至る享受の過程で生成したということも考察している。

教授 廣川晶輝

『万葉集』を中心とした日本上代文学の研究。『万葉集』の歌人、柿本人麻呂・山上憶良・笠金村・山部赤人・大伴家持の長歌作品（長歌+反歌）について、個々の表現が作品内で果たす機能を分析し作品全体の構成を追究する研究を推進している。さらに、作品内の空間把握を分析することで表現史を見定めることを目標とし、〈和歌史〉の構築も目指している。

日本文学

近現代文学研究

教授 木股 知史

近代日本文学と美術の相互交流が主要な研究テーマである。書物の装幀・挿絵とテキストの相互関連性の探究、文学者と美術家の相互影響の調査、〈版〉の表現の諸相の位置づけなどを、1900～1920年代の事象を対象に行ってきた。関連する課題としては、美術領域に拡張した近代日本の象徴主義の再定義、従来のジャンル概念ではとらえきれない小品文学の研究などがある。

教授 塚本 章子

樋口一葉を中心とする明治の文学・思潮の研究。樋口一葉の小説を当時の思想や制度のなかに置き直し、新たな読みや問題性を研究する。また、一葉と関わり、同時代に活躍した斎藤緑雨、馬場孤蝶など、これまであまり注目されることのなかった作家たちにも焦点を当て、非戦論や表現の自由といった新たな角度からその文学を捉え直す。

教授 田中 雅史

文学作品における「もう一つの現実」の研究。異世界などの幻想文学の表現と、20世紀の精神分析、特に世紀半ば以降の対象関係論・自己心理学などの精神内界モデルとの比較。材料として、萩原朔太郎・夢野久作から村上春樹・宮部みゆき・梨木香歩・小野不由美などの現代日本文学、さらには現代のサブカルチャーなど幅広く用いる。

日本語学

日本語学研究

教授 都染 直也

兵庫県南東部地域で実施した地理言語学的調査によって作成した複数言語地図の統合作業と分析。関西から中国地方で実施した社会言語学的調査の結果をまとめた広域方言グロットグラム（地理年代言語図）を用いた方言の動態・動向分析。若者ことば・言語政策など現代日本語にみられる諸現象の社会言語学的観察・収集・分析。

日本文学

古典文学研究

教授 田中 貴子

中世における文学と宗教の問題を中心として、注釈活動から説話が生まれるメカニズムと、それが中世文化全体に及ぼす影響を研究する。また、絵巻や絵入り本などの絵画表現から文学を考える。現在「文学」と呼ばれるものが必ずしも普遍的な価値観に裏付けられておらず、現代に至る享受の過程で生成したということも考察している。

教授 廣川 晶輝

『万葉集』を中心とした日本上代文学の研究。『万葉集』の歌人、柿本人麻呂・山上憶良・笠金村・山部赤人・大伴家持の長歌作品（長歌+反歌）について、個々の表現が作品内で果たす機能を分析し作品全体の構成を追究する研究を推進している。さらに、作品内の空間把握を分析することで表現史を見定めることを目標とし、〈和歌史〉の構築も目指している。

日本文学

近現代文学研究

教授 木股 知史

近代日本文学と美術の相互交流が主要な研究テーマである。書物の装幀・挿絵とテキストの相互関連性の探究、文学者と美術家の相互影響の調査、〈版〉の表現の諸相の位置づけなどを、1900～1920年代の事象を対象に行ってきた。関連する課題としては、美術領域に拡張した近代日本の象徴主義の再定義、従来のジャンル概念ではとらえきれない小品文学の研究などがある。

教授 塚本 章子

樋口一葉を中心とする明治の文学・思潮の研究。樋口一葉の小説を当時の思想や制度のなかに置き直し、新たな読みや問題性を研究する。また、一葉と関わり、同時代に活躍した斎藤緑雨、馬場孤蝶など、これまであまり注目されることのなかった作家たちにも焦点を当て、非戦論や表現の自由といった新たな角度からその文学を捉え直す。

教授 田中 雅史

文学作品における「もう一つの現実」の研究。異世界などの幻想文学の表現と、20世紀の精神分析、特に世紀半ば以降の対象関係論・自己心理学などの精神内界モデルとの比較。材料として、萩原朔太郎・夢野久作から村上春樹・宮部みゆき・梨木香歩・小野不由美などの現代日本文学、さらには現代のサブカルチャーなど幅広く用いる。

英語英米文学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

英語学
イギリス文学・文化
アメリカ文学・文化

修士課程

博士後期課程

コース制

2013年度より新たにコース制を導入。「専門探究コース」では、専門分野を掘り下げることに重点をおいた研究、「多元教養コース」では、人文科学分野に広く目を向けた研究ができます。

専門探究コース

所属専攻の専門分野を中心に学習

専門科目

※専攻横断科目は
8単位まで選択
可能

修士論文

多元教養コース

所属専攻の専門分野を基軸に人文諸学を多元的に学習

専門科目

専攻横断科目
8単位以上
12単位まで履修

修士論文に代わる
成果物

(修士課程のみ。人間科学専攻心理臨床専修は除く。)

英米文学・文化・言語を深く学ぶ

英語英米文学専攻は1964年、大学院人文科学研究科の発足とともに開設された歴史を持ちます。英米文学・文化・言語に関する高度な知識と教養を身につけ、それぞれの研究分野、専門的業務で活躍できる人材の育成を目指しています。研究分野は大きく分けて3つあり、「英語学」「イギリス文学・文化」「アメリカ文学・文化」の各分野で、集中的な教育によって深く豊かな学識を培います。

研究発表の場を数多く設ける

本専攻では、院生の研究発表の機会を数多く設けています。毎年、本学院生、教員、卒業生で構成する甲南英文学会による研究発表会や、学会発表形式での修士論文中間報告会を開催します。また、博士後期課程では全国レベルの学会や専門学会での研究発表を奨励しており、周到な指導体制が、自立した研究活動を支えています。

修士・博士後期課程修了後は、多くの人が中学校や高等学校、大学などで教員として、また広く企業人・公務員として活躍しています。

特色

- 英語学分野では、統語論（生成文法）、意味論、語用論、音声学、心理言語学など多様な専門領域にわたって、英語を主とする言語活動にかかわる実践的理論的研究を行っています。
- イギリス文学・文化の分野では、古典から現代文学まで、小説、詩、戯曲など幅広いジャンルにわたって研究しています。また、文学の領域にとどまらず、歴史学の観点からイギリスの文化的諸問題を解明する研究も進めています。
- アメリカ文学・文化の分野では、小説や詩はもちろんのこと、歴史的文書や思想書なども含めて、植民地時代から現代までの広い意味でのアメリカ文学を研究対象としています。移民の歴史と現状など、アメリカ固有の問題についても研究を行っています。
- いずれの分野においても、院生が確固たる英語力を身につけることを目標としています。英語を母語とする教員による講義・演習も含めて、マンツーマンの集中的な指導のもとで、研究分野の奥深さと異文化間コミュニケーションの重要性の認識へと院生を導きます。
- 修士課程、博士後期課程を問わず、院生には甲南英文学会の機関誌『甲南英文学』に、また査読のうえ、文学部の『紀要』に論文を掲載する機会が設けられています。
- 2013年度からのコース制導入に伴って設置された「専攻横断科目」を履修することで、院生が各自の専門領域を広く人文諸科学の研究成果の文脈に置いて考察し、英語英米文学・文化に対する理解を一層深いものにすることができるよう配慮されています。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

英語学

教授 福島彰利

音声学。音節の時間制御を探究する研究を行っている。このことを、複数音節からなる単語を対象として、音節境界の位置や音節構造が時間制御にどう影響するかを、実験を通して解明することに取り組んでいる。

教授 中谷健太郎

意味論および心理言語学。意味論的関心としては、語の意味がどのように統語現象に関わるかというインタフェースの問題、および日英語対照研究に関心を持つ。特に動詞の意味、テンス、アスペクトなど。心理言語学的関心としては、文をリアルタイムに処理する脳内メカニズム、特にことばと記憶の関係の解明に関心を持ち、実験研究を行っている。

教授 DUFFIELD Nigel G.

Comparative Syntax ; Psycholinguistics, including Language Acquisition ; Language and Cognition. Research publications in the following specific areas : analyses of Vietnamese and Modern Irish grammar ; analyses of German child language ; studies of language representation and processing in second language learners ; studies investigating linguistic factors involved in cross-cultural (Asian-Western) differences in visual attention and recall.

准教授 MARTIN Andrew T.

I specialize in phonology and psycholinguistics. I mainly study how infants learn phonological patterns, using a combination of computational modeling and statistical analysis. I am particularly interested in the role played by probabilistic generalizations in phonological grammars. I also work on the phonetic characteristics of infant-directed speech. My research focuses on Japanese, but I also utilize data from a range of languages.

イギリス文学・文化

教授 井野瀬 久美恵

イギリス史。19世紀後半から20世紀にかけて、大英帝国各地でさまざまな展開された帝国再編の動きをめぐる文化史、社会史的研究。とりわけ、旅や移民、戦争はじめ、人の移動によって帝国にはりめぐらされた情報や文化、知のネットワーク分析が大きな関心事である。

准教授 杉浦 裕子

イギリス文学。エリザベス朝演劇。目下、1580年代までの初期の少年劇団の上演状況と、1599～1600年に活動再開して以降の後期少年劇団の上演状況を調査し、各作品の特徴を比較研究している。また、共同研究として、シェイクスピア劇の材源と改作の翻訳およびテーマ考察にも取り組み中。

教授 岩井 学

イギリス文学。約100年前のD・H・ロレンス、J・M・バリ、H・G・ウェルズといった作家のテキストを分析の対象としてきた。近年は第一次大戦期の社会情勢や当時の言説が、どのような形で文学テキストの中に取り込まれているのかを探り、テキストの新たな読みの可能性を探っている。

アメリカ文学・文化

教授 大森 義彦

アメリカ文学。特に最近関心を持っているのはアメリカ南西部の文学である。ローカル・カラーの文学でありつつトランス・ナショナルな性格も持つこの地域の文学を、アメリカの歴史を見直し、その将来像を探る契機となるものととらえ、研究対象としている。

教授 秋元 孝文

アメリカ文学。紙幣と小説がともに紙という媒体を介し、読まれて初めて意味を発生するテキストであり、そしてある意味ともにフィクションである、という認識のもとに、アメリカ紙幣制度の変遷とアメリカ小説における想像力の間に影響関係やパラレルな関係を見出し、アメリカ文学全体を紙幣という視点から見直すことを課題としている。

教授 安武 留美

アメリカ史。階級・人種・ジェンダー、トランスナショナルをキーワードにアメリカ社会の歴史の変遷及びアメリカ社会と世界とのかかわりを研究している。現在は、戦間期の国際女性運動の台頭と日・米・アジア諸国とのかかわりについて研究している。

英語学

教授 DUFFIELD Nigel G.

Comparative Syntax ; Psycholinguistics, including Language Acquisition ; Language and Cognition. Research publications in the following specific areas : analyses of Vietnamese and Modern Irish grammar ; analyses of German child language ; studies of language representation and processing in second language learners ; studies investigating linguistic factors involved in cross-cultural (Asian-Western) differences in visual attention and recall.

教授 中谷 健太郎

意味論および心理言語学。意味論的関心としては、語の意味がどのように統語現象に関わるかというインタフェースの問題、および日英語対照研究に関心を持つ。特に動詞の意味、テンス、アスペクトなど。心理言語学的関心としては、文をリアルタイムに処理する脳内メカニズム、特にことばと記憶の関係の解明に関心を持ち、実験研究を行っている。

イギリス文学・文化

教授 井野瀬 久美恵

イギリス史。19世紀後半から20世紀にかけて、大英帝国各地でさまざまな展開された帝国再編の動きをめぐる文化史、社会史的研究。とりわけ、旅や移民、戦争をはじめ、人の移動によって帝国にはりめぐらされた情報や文化、知のネットワーク分析が大きな関心事である。

アメリカ文学・文化

教授 大森 義彦

アメリカ文学。特に最近関心を持っているのはアメリカ南西部の文学である。ローカル・カラーの文学でありつつトランス・ナショナルな性格も持つこの地域の文学を、アメリカの歴史を見直し、その将来像を探る契機となるものととらえ、研究対象としている。

教授 安武 留美

アメリカ史。階級・人種・ジェンダー、トランスナショナルをキーワードにアメリカ社会の歴史の変遷及びアメリカ社会と世界とのかかわりを研究している。現在は、戦間期の国際女性運動の台頭と日・米・アジア諸国とのかかわりについて研究している。

教授 秋元 孝文

アメリカ文学。紙幣と小説がともに紙という媒体を介し、読まれて初めて意味を発生するテキストであり、そしてある意味ともにフィクションである、という認識のもとに、アメリカ紙幣制度の変遷とアメリカ小説における想像力の間に影響関係やパラレルな関係を見出し、アメリカ文学全体を紙幣という視点から見直すことを課題としている。

応用社会学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

社会と文化 歴史と地理・民俗

修士課程

博士後期課程

コース制

2013年度より新たにコース制を導入。「専門探究コース」では、専門分野を掘り下げることに重点をおいた研究、「多元教養コース」では、人文科学分野に広く目を向けた研究ができます。

専門探究コース

所属専攻の専門分野を中心に学習

専門科目

※専攻横断科目は8単位まで選択可能

修士論文

多元教養コース

所属専攻の専門分野を基軸に人文諸学を多元的に学習

専門科目

専攻横断科目
8単位以上
12単位まで履修

修士論文に代わる
成果物

(修士課程のみ。人間科学専攻心理臨床専修は除く。)

社会・文化を 探究する

応用社会学専攻は、1964年に修士課程、1971年に博士後期課程が開設されました。修士課程、博士後期課程ともに、専門領域を越えた交流のなかで、社会や文化の基礎的な原理を理解し、社会の変化を的確にとらえ、新しい状況を切り拓く能力を養います。

実践的な研究を行う

本専攻では、国内有数の業績を誇る教員によって、少人数での丁寧な指導が行われています。研究活動では、理論だけでなくフィールドワークなどの実践的な研究も行われ、多様な地域の研究が可能です。大学院生の研究会・学会への参加も活発で、学際的な知識と専門性を身につけることを目指しています。修了者の多くは、学界・教育界・メディア業界などの第一線で活躍しています。

特色

- 修士課程に「社会と文化」「歴史と地理・民俗」を設置しています。
- 「社会と文化」分野では、家族社会学、地域社会学、都市社会学、文化社会学、歴史社会学、労働社会学、社会ネットワーク論、文化人類学、表象文化論などの多彩な研究・教育が、マルチメディアを活用して行われています。
- 「歴史と地理・民俗」分野では、日本はもちろん、世界各地のさまざまな時代における社会や文化・思想について、歴史学・地理学・民俗学の側面から多彩な研究・教育が行われています。
- 博士後期課程では、「甲南大学紀要(文学編)」に論文を掲載する機会が設けられ、大学院生の目標の1つになっています。
- 毎年、多くの研究助成を得て、学際的・国際的な共同研究を行っています。
- 高等学校教諭専修免許状(地理歴史、公民)、中学校教諭専修免許状(社会)、専門社会調査士などの資格が取得可能です。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

社会と文化

社会学、文化人類学

教授 谷 富夫

都市社会学、民族関係論、宗教社会学。これまで「都市コミュニティの形成条件」、「沖縄の過剰都市化」、「多民族共生の可能性」、「現代宗教と若者」などのテーマに取り組んできた。質的社会調査法を用いることが多いが、質的調査と量的調査の混合社会調査法が社会調査の望ましいあり方であると考えている。

教授 菅 康弘

「旅することと住むことの間」。脱都市・田舎暮らしを選択した移住者へのインタビュー、流行歌やさまざまなメディアの言説分析を通じ、都市と地域と観光という3領域の接点から、空間と人間の相互作用、「場所」への愛着などを考察している。

教授 栗田 宣義

文化社会学、社会運動論、理論社会学。大都市圏における若年層のファッションとメイクに係わる総合的研究が中心テーマ。服飾美容化粧品に代表される行動文化のストリートでの測定、ファッション誌の内容分析、カフェやキャラクターグッズなど関連アイテムの系統的観察を通じて、急性かつ短期的流行としてのファッドからはじまり、社会システムのマクロ変動を産み出しうる一連のムーブメントに至る長期的流行までを、集合行動collective behaviorならびに集合行為collective action双方の視角から研究している。

教授 西川 麦子

日本の近代化における出産の変化、バングラデシュの村落社会、物乞研究、イギリス、ロンドンでの地域コミュニティ形成に関する調査研究をへて、現在は、アメリカにおいて、草の根活動と地域メディアに関するフィールドワークを実施中。人や情報、モノがグローバルに移動する現代社会において、人と人、場所、社会との関わり方、つながり方を、どのようにとらえ、伝えることができるのか、方法論を探究している。

社会と文化

社会学、文化人類学

教授 中里 英樹

現代日本の子育て期の仕事と生活が、現在の主たるテーマ。特にジェンダー秩序や人口構造、さらに社会政策の効果に注目して、現状の課題とそれを乗り越える方策について考察している。また現代日本の状況を相対化するために、歴史的変化の分析や国際比較（オーストラリア、ドイツ、スウェーデン、ノルウエーなど）も行っている。

教授 松川 恭子

インド西部、ゴア州をフィールドに、多言語状況にみる社会関係の変容、インドのキリスト教、インド(特にゴア)の食文化について考察を行ってきた。個人や集団が多様な社会関係の中でいかに自己の文化資源を意識化し、実践を行っているのかという点に関心がある。最近、演劇を通じたゴア人ディアスポラのつながりを考えるため、湾岸諸国でのフィールドワークを行っている。

教授 星 敦士

パーソナル・ネットワークを中心とした社会ネットワークを主たる研究テーマとしている。特に個人が取り結ぶ社会関係が、行動や意識のあり方(例えば、出生に関する意識や行動、地域活動・市民活動への参加など)に与える影響について、社会関係の測定方法も含めて計量的なアプローチで分析を行っている。

教授 田野 大輔

ナチ・ドイツにおけるマスコミュニケーションの問題、とくに宣伝の効果や娯楽の実態、セクシュアリティの問題などについて、表象分析の手法を用いながら歴史社会的に研究している。また、最近では余暇・厚生領域における日独文化交流の研究にも手を広げている。

教授 帯谷 博明

環境社会学、地域社会学、市民参加論。日本およびベトナムの農漁村を主な対象に、ローカルな資源・環境の保全や利用、再生(創造)のあり方を、「持続可能性」の観点から探っている。また近年は、アメリカおよび日本における参加型アクション・リサーチ(CBPR)の理論と実践にも関心を持っている。

教授 阿部 真大

労働社会学、家族社会学、福祉国家論。ポスト日本型福祉社会における労働・家族・国家のあり方について研究している。2000年代は主に若年労働の現場でフィールドワークを行っていたが、今後は介護と相続をめぐる歴史研究にシフトしていく予定である。

歴史と地理・民俗

諸文化の歴史的研究、地域の民俗地理的研究

教授 稲田 清一

専攻は中国近世・近代史。この時期に中国の農村社会がどのように変容したのに関心を持ち、19世紀前後の江南地方における地域社会の諸問題、特に市鎮(市場町)を中心として行われた公共事業とそれを支えた社会体制をめぐる問題について調べている。

教授 高田 実

イギリス近現代史、とくに「福祉の複合体」史を研究している。福祉は、国家福祉だけではなく、相互扶助、慈善、地域福祉、企業福祉など多様な担い手と多層的な原理によって成り立つ構造的複合体であるという視点から、その総体が時間の経過とともにどのように変形してきたのか、またその福祉の網の目を民衆はどのように渡り歩いてきたのかを、ヨーロッパ史を対象として検討している。

教授 東谷 智

専門は日本近代史、史料の調査・整理論。藩政、行政機構、税の収支体系、法制度などをキーワードとして、江戸時代の社会の仕組みについて研究している。彦根藩(近江)、長岡藩(越後)、鯖江藩(越前)をフィールドとして研究を進めており、近年特に藤堂高虎を藩祖とする藤堂藩(伊賀・伊勢)の研究に取り組んでいる。藩政文書と地方文書、双方を用いた研究スタイルをとっている。

教授 中町 信孝

専門はアラブ中世史、マムルーク朝史。アラビア語の手書き本(写本)史料の形態学的・文献学的分析を通じて、イスラーム社会の知識人である「ウラマー」による知の社会的実践のあり方を研究している。また近年は、エジプトを中心とする現代アラブ社会の大衆文化とその社会的影響についても注目している。

教授 中辻 亨

専攻は人文地理学、文化生態学。東南アジアの主にラオスにおいて、山地に住む少数民族(山地民)の焼畑や家畜飼養などの伝統的な生計活動の変化、彼らと国家との関係、航空写真や衛星画像とGISを使った長期的な土地利用の変化などに関する研究を進めてきた。

教授 出口 晶子

専攻は民俗地理学。フィールドは主として日本。水辺の生活文化と景観、観光を通じた流域活動について調査研究中。10年、20年越しでフィールドに通いながら、山河海を組み立てる現地踏査を重視している。琵琶湖、北陸の諸河川、若狭湾や能登半島、瀬戸内などは、とくに長期にわたり研究している。

教授 佐藤 泰弘

日本の古代・中世史—特に平安時代から鎌倉時代—の社会・経済を研究している。荘園と貴族社会、商業と流通、貨幣と為替などが主たる研究テーマである。新しい研究テーマや斬新な歴史・社会理論に関心があり、古典的な問題群を伝統的な手法で再検討することの方に面白さがある。

教授 鳴海 邦匡

専攻は人文(歴史)地理学。特に近世から近代にかけての地図史と環境史を主なテーマとして研究している。なかでも地図史については、地図作製をめぐる測量技術、東アジア海域における海図作製の歴史など、また、環境史については、近世の淀川水系の治水、身近な森林における植生景観の変化、湿地景観の変遷などの研究をすすめている。

教授 佐藤 公美

専門はイタリア中世・ルネサンスの政治社会史。北イタリアのロンバルディア、ピエモンテ、トレンティーノ＝アルト・アディジェが主なフィールド。中世の都市・農村・渓谷の共同体、ゲルフィとギベッリーニの党派や親族、貴族のコミュニティーなどの多様な人間集団が関係を取り結び、争い、平和と共同性をつくる政治過程と、国家的なものに関わりを研究している。近年は特にアルプス山間の地域社会ネットワークと都市的な場のインタラクションに注目して研究を進めている。

教授 谷 富夫

都市社会学、民族関係論、宗教社会学。これまで「都市コミュニティの形成条件」、「沖縄の過剰都市化」、「多民族共生の可能性」、「現代宗教と若者」などのテーマに取り組んできた。質的社会調査法を用いることが多いが、質的調査と量的調査の混合社会調査法が社会調査の望ましいあり方であると考えている。

教授 出口 晶子

専攻は民俗地理学。フィールドは主として日本。水辺の生活文化と景観、観光を通じた流域活動について調査研究中。10年、20年越しでフィールドに通いながら、山河海を組み立てる現地踏査を重視している。琵琶湖、北陸の諸河川、若狭湾や能登半島、瀬戸内などは、とくに長期にわたり研究している。

教授 栗田 宣義

文化社会学、社会運動論、理論社会学。大都市圏における若年層のファッションとメイクに係わる総合的研究が中心テーマ。服飾美容化粧品に代表される行動文化のストリートでの測定、ファッション誌の内容分析、カフェやキャラクターグッズなど関連アイテムの系統的観察を通じて、急性かつ短期的流行としてのファッドからはじまり、社会システムのマクロ変動を産み出しうる一連のムーブメントに至る長期的流行までを、集合行動collective behaviorならびに集合行為collective action双方の視角から研究している。

教授 中里 英樹

現代日本の子育て期の仕事と生活が、現在の主たるテーマ。特にジェンダー秩序や人口構造、さらに社会政策の効果に注目して、現状の課題とそれを乗り越える方策について考察している。また現代日本の状況を相対化するために、歴史的变化の分析や国際比較（オーストラリア、ドイツ、スウェーデン、ノルウェーなど）も行っている。

教授 松川 恭子

インド西部、ゴア州をフィールドに、多言語状況にみる社会関係の変容、インドのキリスト教、インド(特にゴア)の食文化について考察を行ってきた。個人や集団が多様な社会関係の中でいかに自己の文化資源を意識化し、実践を行っているのかという点に関心がある。最近、演劇を通じたゴア人ディアスポラのつながりを考えるため、湾岸諸国でのフィールドワークを行っている。

教授 星 敦士

パーソナル・ネットワークを中心とした社会ネットワークを主たる研究テーマとしている。特に個人が取り結ぶ社会関係が、行動や意識のあり方(例えば、出生に関する意識や行動、地域活動・市民活動への参加など)に与える影響について、社会関係の測定方法も含めて計量的なアプローチで分析を行っている。

教授 菅 康弘

「旅することと住むことの間」。脱都市・田舎暮らしを選択した移住者へのインタビュー、流行歌やさまざまなメディアの言説分析を通じ、都市と地域と観光という3領域の接点から、空間と人間の相互作用、「場所」への愛情などを考察している。

教授 高田 実

イギリス近現代史、とくに「福祉の複合体」史を研究している。福祉は、国家福祉だけではなく、相互扶助、慈善、地域福祉、企業福祉など多様な担い手と多層的な原理によって成り立つ構造的複合体であるという視点から、その総体が時間の経過とともにどのように変形してきたのか、またその福祉の網の目を民衆はどのように渡り歩いてきたのかを、ヨーロッパ史を対象として検討している。

教授 西川 麦子

日本の近代化における出産の変化、バングラデシュの村落社会、物乞研究、イギリス、ロンドンでの地域コミュニティ形成に関する調査研究をへて、現在は、アメリカにおいて、草の根活動と地域メディアに関するフィールドワークを実施中。人や情報、モノがグローバルに移動する現代社会において、人と人、場所、社会との関わり方、つながり方を、どのようにとらえ、伝えることができるのか、方法論を探究している。

教授 田野 大輔

ナチ・ドイツにおけるマスコミュニケーションの問題、とくに宣伝の効果や娯楽の実態、セクシュアリティの問題などについて、表象分析の手法を用いながら歴史社会的に研究している。また、最近は余暇・厚生領域における日独文化交流の研究にも手を広げている。

教授 帯谷 博明

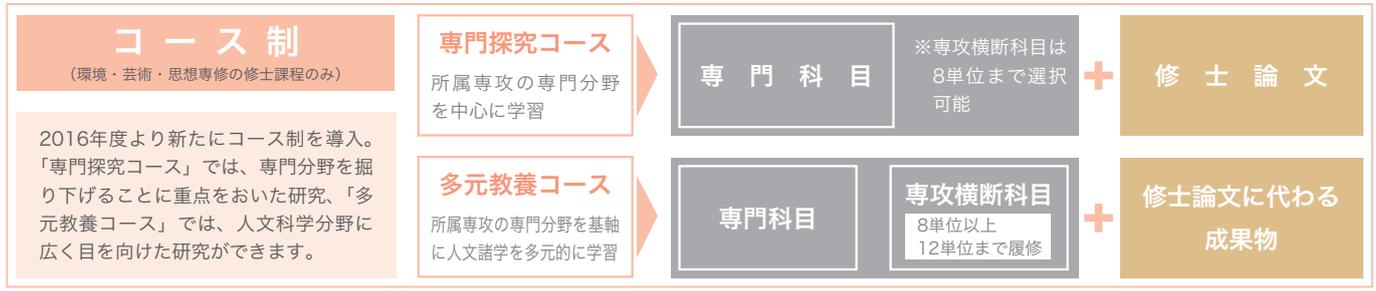
環境社会学、地域社会学、市民参加論。日本およびベトナムの農漁村をおもな対象に、ローカルな資源・環境の保全や利用、再生(創造)のあり方を「持続可能性」の観点から探っている。また近年は、アメリカおよび日本における参加型アクション・リサーチ(CBPR)の理論と実践にも関心を持っている。

教授 阿部 真大

労働社会学、家族社会学、福祉国家論。ポスト日本型福祉社会における労働・家族・国家のあり方について研究している。2000年代は主に若年労働の現場でフィールドワークを行っていたが、今後は介護と相続をめぐる歴史研究にシフトしていく予定である。



人間科学専攻



現代人の心の危機的状況を読み解く

人間科学専攻には、環境・芸術・思想と心理臨床の2専修が設置されており、現代人の心を幅広いスタンスでとらえ、同時に環境・芸術・思想と心理学の視点から実践的にかかわっていくことができる人材の養成をめざしています。

人文諸科学の専門家との高度な共同研究を推進し、地域に開かれた実践を行っています。

多方面で活躍する修了生

多くの修了生が、臨床心理士や博物館学芸員、専修免許を有する教員として活躍してきました。2019年度入学生からは、新たなカリキュラムに変わり、高度な研究能力と幅広い教養を兼ね備えた人材を輩出していきます。

特色

- 環境・芸術・思想専修では、現代思想の流れ、社会構造、環境問題、家族や人間関係の変化、芸術と福祉、芸術の公共性などをテーマに、環境教育学、芸術論、哲学、倫理学、メディア史学、表象文化論の立場から総合的に研究しています。
- 心理臨床専修では、(公財)日本臨床心理士資格認定協会から早い時期に第1種指定を受け、医療・福祉・教育・司法の分野で活躍する臨床心理士を数多く輩出してきました。(臨床心理士養成は、2018年度入学生をもって終了しました。2019年度からは、これまでの資源を活用しつつも、高度な研究能力と幅広い教養の獲得を両立できる高度専門職業人を養成するカリキュラムに変更されました。)
- 環境・芸術・思想と心理臨床の2専修は、相互に刺激し合い、また重なりながら人間の心と人間の存在をテーマごとにとらえつつ、それぞれ独自の展開を進めています。

※人間科学専攻は公認心理師資格の取得には対応していません。資格取得を目指されている受験生の方は、対応している大学院を受験してください。

分野・主要内容・担当教員 研究内容 修士課程

環境・芸術・思想専修

教授 木村 博

「責任」というキーワードを基軸として、哲学・倫理学、とりわけドイツ観念論と環境倫理学を研究している。また、日本思想にも関心があり、「場所」とは区別された「場」の思想を、「普遍的なものにならない特長的なもの」の意義を明らかにしたいと考えている。

教授 西 欣也

芸術や感性をめぐる様々な問題について、社会的歴史的な関心のもとに考察する。現在という自らの立脚点を常に意識する一方、理論的手続きのための基礎概念や芸術の史的展開を踏まえて、多様な観点から人間を分析することを旨とする。

准教授 川口 茂雄

21世紀における人間のあり方を哲学・メディア史学・宗教学の観点から研究する。19世紀から続いてきた近代化の流れの延長線上に21世紀があるのか、それとも19・20世紀とは異なる時代に私たちは入っているのか。デジタル時代の最新の文献・作品から、フランス革命期の文献・作品にまで幅広く取り組んで、深い次元で考えてゆきたい。

教授 川田 都樹子

専門は美学・芸術学。特に近・現代の美術批評を中心に研究中。芸術における「モダニズム」の誕生・発展・解体の過程に、美術批評がいかに関わったのかを調べている。他に芸術における「グロテスク」表現や、「パブリック」概念、「アートセラピー」などにも関心がある。

教授 服部 正

芸術学、芸術史学の見地から、美術をめぐる社会現象を研究している。特に障害のある人のアート活動や「アウトサイダーアート」など、美術と福祉の関係に関心がある。また、民族芸術学的関心から、異なる文化が接触する領域における現象にも興味がある。

心理臨床専修

教授 森 茂 起

精神分析、トラウマ理論を用いた心理療法の実践。特に、虐待や愛情剥奪の体験を持つ子どもの遊戯療法、災害後の子どもへの心のケア。実践の場は、児童養護施設における心理臨床、学校カウンセラーなど。子育て支援対策、子ども虐待防止対策についても実践的に関わっている。

教授 富 樫 公 一

精神分析、中でも現代自己心理学、関係精神分析と呼ばれる考え方に基づいた臨床実践。具体的には、嗜癖や性的逸脱、暴力、抑うつ、トラウマ、自己体験の喪失といった心理的問題の支援と、そうした問題の背景に展開する心的プロセスの変容過程に関心を持っている。実践の場は、私設相談と地域医療を支える総合病院。

特任教授 子 安 増 生

心のモジュール説、特に多重知能理論に基づく認知発達研究、「心の理論」の研究、ならびに、定型発達と非定型発達の関連性を検討する発達心理学的研究。

准教授 大 西 彩 子

児童・生徒のいじめや非行、発達障害のある児童・生徒の学校適応について研究している。また、研究から得られた知見を教師やスクール・カウンセラーが活用可能なツールにするための実践研究も行っている。臨床活動の場は、主に小学校、中学校などの学校現場。

環境・芸術・思想専修

教授 木 村 博

「責任」というキーワードを基軸として、哲学・倫理学、とりわけドイツ観念論と環境倫理学を研究している。また、日本思想にも関心があり、「場所」とは区別された「場」の思想を、「普遍的なものにならない特称的なもの」の意義を明らかにしたいと考えている。

教授 西 欣 也

芸術や感性をめぐる様々な問題について、社会的歴史的な関心のもとに考察する。現在という自らの立脚点を常に意識する一方、理論的手続きのための基礎概念や芸術の史的展開を踏まえて、多様な観点から人間を分析することを目指す。

心理臨床専修

教授 森 茂 起

精神分析およびトラウマ学を用いた心の原初領域の研究と心理療法の実践。理論的問題としてトラウマ理論の再検討。特に、愛情剥奪体験を持つ子どもの遊戯療法、災害後の子どもへの心のケア。実践の場は、養護施設における心理臨床、学校カウンセラーなど。戦争によるトラウマの調査研究および治療実践の試みも進めている。

教授 富 樫 公 一

精神分析、中でも現代自己心理学、関係精神分析と呼ばれる考え方に基づいた臨床実践。理論的側面としては、一方向一者心理学的精神分析理論を再検討し、精神分析治療過程を動的システム理論や複雑系の理論を用いて新たに描写しなおすことの意義を明らかにしようとしている。実践の場は、私設相談と地域医療を支える総合病院。地域医療における臨床心理士の活動領域拡大にも興味を持っている。

特任教授 子 安 増 生

心のモジュール説、特に多重知能理論に基づく認知発達研究、「心の理論」の研究、ならびに、定型発達と非定型発達の関連性を検討する臨床発達心理学的研究。

教授 北 川 恵

発達早期の関係性に基づく人格発達の理解とアセスメントに関する研究、発達研究知見と心理臨床の橋渡しに関する理論的・実践的研究に取り組んでいる。特に、アタッチメントに基づいた親子の関係性支援に携わっている。

教授 福 井 義 一

リソース志向・身体志向の心理療法を用いて、PTSDや解離性障害を始めとした様々なトラウマ関連障害のケアを専門としている。またトラウマ、解離、愛着をキーワードに、トラウマ関連障害の治療メカニズムの解明を目指して臨床心理研究を推進している。

准教授 大 澤 香 織

主にトラウマによる症状の維持・悪化のメカニズム解明とそれに基づいた介入法、症状予防対策の開発について、認知行動療法の理論や技法を基盤に研究している。臨床活動は医療機関や産業界などにおいて、気分障害(うつ病など)やPTSDなどのストレス関連障害を中心に実践。

講師 野 崎 優 樹

「情動知能」をはじめとする、感情と対人能力の個人差と認知過程を実証的に明らかにする基礎研究を専門としている。また、これらの実証研究の知見を踏まえて、他者の情動の制御に関する理論モデルの構築にも取り組んでいる。

教授 川 田 都 樹 子

専門は美学・芸術学。特に近・現代の美術批評を中心に研究中。芸術における「モダニズム」の誕生・発展・解体の過程に、美術批評がいかに関わったのかを調べている。他に芸術における「グロテスク」表現や、「パブリック」概念、「アートセラピー」などにも関心がある。

教授 北 川 恵

発達早期の関係性に基づく人格発達の理解とアセスメントに関する研究、発達研究知見と心理臨床の橋渡しに関する理論的・実践的研究に取り組んでいる。特に、アタッチメントに基づいた親子の関係性支援に携わっている。

教授 福 井 義 一

リソース志向・身体志向の心理療法を用いて、PTSDや解離性障害を始めとした様々なトラウマ関連障害のケアを専門としている。またトラウマ、解離、愛着をキーワードに、トラウマ関連障害の治療メカニズムの解明を目指して臨床心理研究を推進している。

Graduate School of Natural Science

自然科学研究科

物理学専攻
化学専攻
生物学専攻
生命・機能科学専攻
知能情報学専攻



理工学部および知能情報学部を母体とする自然科学研究科は、物理学専攻（修士および博士後期課程）、化学専攻（修士課程）、生物学専攻（修士課程）、生命・機能科学専攻（博士後期課程）および知能情報学専攻（修士および博士後期課程）を擁し、純粋科学分野から応用科学分野までを幅広くカバーし、最先端の研究とともに、分野の壁を越えた交流も盛んに行っています。いずれの専攻においても、科学技術を発展させ、創造性を発揮できる幅広い学識と柔軟な応用能力を持つ人材の育成を目指し、充実した教員・研究のプログラムを持っています。

本研究科では、独自の研究をはじめとして、他大学や研究所・企業との共同研究も盛んに行っています。研究施設と設備は非常に充実しており、例えば、電子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、レーザーアブレーションシステム、超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置、サブピコ秒レーザー分光装置、遺伝子分離解析システム、顕微ラマン分光システム、細胞分析装置、非侵襲的生体情報計測装置、モーションキャプチャシステム、ドライビングシミュレータ、コミュニケーションロボットなどを備えています。

本研究科では、2019年3月までに、1,310名の修士、108名の博士（うち、27名は論文博士）を輩出しています。これらの大学院修了者は研究、教育、公務、産業など、社会のさまざまな分野で活躍しています。

物理学専攻

分野

修士課程

理論宇宙物理学

宇宙粒子物理学

原子核物理学

宇宙核物理学

光・量子エレクトロニクス

光物性物理学

博士後期課程

半導体物理学

電子物性物理学

修士課程

博士後期課程

基礎から応用分野まで幅広く研究する

物理学専攻は、修士課程、博士後期課程ともに1964年に開設されました。研究分野は、原子核物理学から宇宙物理学、そして物性物理学と、基礎から応用分野まで幅広くカバーし、最先端の研究を行っています。また他大学や企業、諸外国の大学などの研究機関との共同研究も活発に行われています。

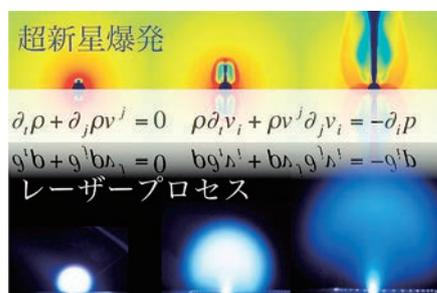
専門性を磨き、多様な分野で活躍する

本専攻の目標としては、基礎的な研究に携わり、これを発展させていくことのできる人材、また、物理の方法論を修得して、それを適切に工学応用に結びつけることのできる高度技術者の育成を目指しています。

修士課程修了時点で、多くの学生が民間企業に就職しています。博士後期課程では、博士の学位を取得後、大学、高専、国公立の研究機関などで研究者として活躍しています。

特色

- 研究分野としては、原子核および宇宙諸現象の研究と、量子ナノテクノロジーや強相関物質などの物性物理学に関する研究があります。物理学専攻設立当初の原子核・素粒子・宇宙線・原子物理・量子エレクトロニクス・固体分光などの研究が発展し、現在では、宇宙での原子核合成、超高エネルギー宇宙現象、初代天体形成、超新星爆発、ナノ微細構造半導体の物性研究、ナノ有機微粒子の光物性、量子情報の基礎研究、固体における電子輸送の研究などへと広がり、多くの研究成果をあげています。
- 原子核物理学分野ではニュースバル放射光施設で生成されるレーザー逆コンプトンガンマ線を利用した宇宙での原子核合成、宇宙物理学関連分野では超高エネルギー宇宙の現象や宇宙の起源を探る最先端の研究を行っています。
- 物性物理学関連分野では、波長可変光短パルス測定装置、磁気光学効果測定装置、高分解能光電子分光装置、パルスレーザー材料プロセス装置など実験機器が充実しており、量子ナノテクノロジーや強相関物質などの物性物理学についての最先端の研究を行っています。



分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

博士後期課程

理論宇宙物理学

宇宙物理学の理論的研究、特に初代天体の形成、超新星爆発・ガンマ線バーストの研究。

教授 須佐 元 (修士課程・博士後期課程)

宇宙におけるさまざまな天体現象を物理学の手法を用いて理論的に研究している。特に宇宙のごく初期にあらわれた星・銀河などの形成のメカニズムを、主に大規模数値シミュレーションの手法を用いて調べている。

教授 富永 望 (修士課程・博士後期課程)

宇宙に関する理論的・観測的研究を行っている。特に、超新星爆発の爆発機構、ガンマ線バーストの輻射機構、宇宙の元素の起源の解明を目的とし、主に数値シミュレーションを用いた理論研究、すばる望遠鏡などによる観測研究を行っている。

宇宙粒子物理学

極限エネルギー宇宙線、超高エネルギーガンマ線などの宇宙粒子の起源や加速機構の実験的研究。

教授 梶野 文義 (修士課程・博士後期課程)

宇宙から飛来する宇宙線、ガンマ線、暗黒物質候補粒子、流星体などの宇宙起源粒子を地上や宇宙から観測するために、装置開発、観測・実験・シミュレーションを行い、それらの起源などの解明を目指して研究を行っている。

教授 山本 常夏 (修士課程・博士後期課程)

宇宙における高エネルギー現象の研究。特に宇宙で最もエネルギーの高い粒子や光を国際共同実験により観測し、その起源と伝搬を調べている。

原子核物理学

原子核構造、および原子核反応の実験的研究。原子核実験用測定装置およびデータ処理についての研究。

教授 宇都宮 弘 章 (修士課程・博士後期課程)

レーザー逆コンプトンガンマ線ビームを用いた原子核物理学（核反応、核構造、核データ）の研究。国際原子力機関の共同研究プロジェクトIAEA-CRP F41032のためオスロ大学、ELI-NP研究所、モスクワ大学と共同研究を行っている。

教授 秋 宗 秀 俊 (修士課程・博士後期課程)

原子核物理の実験的研究。陽子、ヘリウムなどの軽イオンビームをプローブとして用いた原子核の高励起状態の構造の研究。レーザー光と高エネルギー電子の逆コンプトン散乱によって得られるMeV領域からGeV領域のガンマ線を用いた原子核反応の研究。

宇宙核物理学

宇宙核物理（元素の起源および宇宙の核現象）に関する研究。

教授 宇都宮 弘 章 (修士課程・博士後期課程)

レーザー逆コンプトンガンマ線ビームを用いて、超新星爆発やAGB星での元素合成に関わる実験的研究。ブリュッセル自由大学（ベルギー）、オスロ大学（ノルウェー）、モスクワ大学（ロシア）等と共同研究を行っている。



光・量子エレクトロニクス

低次元物質における光非線形効果の解明と新光機能の創成に関する研究。量子暗号通信用の単一光子計測の研究。

教授 安 藤 弘 明 (修士課程・博士後期課程)

新しいデバイス機能や情報処理方式の創成をめざして、光・量子エレクトロニクスの基礎的研究を行っている。超高速光デバイスへの応用を目的とした光非線形現象の研究、および量子暗号通信の実現をめざした単一光子計測法の研究などが主要なテーマである。

教授 市 田 正 夫 (修士課程・博士後期課程)

固体の非線形・超高速レーザー分光。新しい光デバイス材料となる非線形光学材料や探索とその応用をめざし、基礎研究を行っている。特に、フラーレンやカーボンナノチューブなどの低次元構造を持つ炭素クラスターを、現在の研究対象としている。

光物性物理学

有機半導体の薄膜やナノ微粒子の作製およびその光学特性に関する研究。無機半導体ナノ微粒子の光学特性の研究。

教授 青 木 珠 緒 (修士課程・博士後期課程)

有機半導体に対する基礎研究としてアントラセンを代表とする芳香族分子性結晶に対し、良質の薄膜作製やナノ微粒子作製、分子の凝集状態と光学特性の関係について主に研究している。その他、時間分解測定、磁場中の測定なども含めた総合的な光学測定を行っている。



半導体物理学

ナノスケールの構造をもった半導体中の光過程の解明とデバイスへの応用についての研究。

教授 梅 津 郁 朗 (修士課程・博士後期課程)

パルスレーザープロセスの強い非平衡性を利用した非平衡ナノ構造半導体の形成過程、非平衡ナノ構造半導体中での光及び電気伝導過程、非平衡ナノ構造半導体の太陽光エネルギー変換デバイスへの応用、等の研究を行っている。



電子物性物理学

スピントロニクス材料の量子輸送と強相関電子系物質の電子状態の研究。

教授 小 堀 裕 己 (修士課程・博士後期課程)

ハーフメタル、遷移金属酸化物、半導体、強磁性体、強誘導体、強相関電子系物質、および、これらの物質のナノ構造、複合構造、マルチフェロイックスに関する量子輸送と高機能化、スピントロニクスへの応用の研究。

教授 山 崎 篤 志 (修士課程・博士後期課程)

強相関電子系化合物やナノ物質の電子状態をシンクロトロン放射光や実験室光源を用いた光電子分光などの分光実験により明らかにする研究を行っている。

化学専攻

分野

修士課程

有機材料化学 有機合成化学 環境分析・計測化学 固体構造化学
表面・界面物理化学 光エネルギー変換材料化学 機能設計・解析化学
構造有機化学 無機固体化学 界面・コロイド化学 生体材料創成学

博士後期課程

修士課程

現代社会の動向に
即した研究を展開

化学専攻は、1964年に理学部化学科・応用化学科（現 理工学部機能分子化学科）を母体として開設され、精深な学識と研究能力を養うことをめざしています。現在、以下の研究分野において、現代社会の動向に即した独創的かつ先駆的な研究を展開しています。

広く社会に貢献する
修了者たち

本専攻の修了者の多くは、研究活動で身につけた能力を生かし、修士課程修了と同時に関連企業の研究・技術職として就職しています。最近では、ベンチャー企業への就職も増えてきており、また、さらなる精深な学識と研究能力を身につけた研究者の道をめざして、生命・機能科学専攻（博士後期課程）に進学する人もいます。

特色

- 研究分野としては、有機材料化学、有機合成化学、環境分析・計測化学、固体構造化学、表面・界面物理化学、光エネルギー変換材料化学、機能設計・解析化学、構造有機化学、無機固体化学、界面・コロイド化学および生体材料創成学の分野を設けており、基礎から応用までの幅広い分野をカバーし、高度の研究を通して大学院生の教育を行っています。
- 産・官・学が協力した、現代社会の動向に即した独創的かつ先駆的研究が展開されています。
- 研究活動の成果は、日本化学会をはじめ、各種の専門学会で発表されることが期待されています。
- 本専攻では、顕微レーザーラマン分光器、高分解能NMR、単結晶X線回折装置、粒子径・ゼータ電位・分子量測定システム、ハイパフォーマンス並列計算機などのトップレベルの研究設備を整えており、充実した研究環境のもとで、専門性を磨くことが可能です。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

有機材料化学

光電子機能を有する高分子材料の創製

准教授 木本篤志

有機電子材料化学について研究を推進している。具体的には、金属集積部位を導入した有機-無機ハイブリッド型 π 共役高分子の創製、分子技術を基盤とした環境適合プロセスのための新材料の自己組織化能の評価を行い、有機薄膜太陽電池などの有機電子素子への応用をめざしている。

環境分析・計測化学

溶媒抽出法を基盤とする分離分析化学

教授 茶山健二

特定の金属イオン、特に貴金属イオンと選択的に反応する機能性分子の開発を行っている。具体的には、分子内に硫黄原子を有する有機試薬を合成し、溶媒抽出法により金属イオンに対する選択性を評価する。最近では環境中の有害化学物質あるいは食品中の栄養成分の定量に関する研究も行っている。

表面・界面物理化学

表面・界面に関する物理化学：測定と理論

教授 山本雅博

固体表面や固体-液体界面、さらには液体-液体界面の構造やその場での化学反応について、実験と理論の両面から研究を行っている。具体的には金属の清浄表面や電極-電解質溶液界面、電解質溶液中の単独イオン活量を検討している。

機能設計・解析化学

反応機構の精密解析と機能分子・反応設計

教授 岩月聡史

分析化学的に重要な無機溶液反応メカニズムを速度論的に解明し、化学種の溶存状態と反応性との相関について定量的に検討している。また、反応性に関する定量データに基づいて、有用な反応を巧みに利用した新規な分析化学反応の開拓や選択的分離技術開発に展開している。

無機固体化学

全固体リチウム電池を中心とする材料化学

教授 町田信也

特に高いイオン伝導性を示す非晶質材料に興味を持っており、これらの材料の合成、物性、構造について研究している。最近では、このような非晶質材料を用いた全固体型電池の開発・研究にも取り組んでいる。

生体材料創成学

高分子を基盤としたバイオマテリアル学

教授 渡邊順司

高分子鎖の自発的な偏析に基づく材料表面およびバルクの瞬発的な特性変換を実現し、多様な生体内環境での機能発現が求められるバイオマテリアルとしての応用に向けた基盤材料について研究している。

有機合成化学

新規有機超分子化合物群の創製と機能評価

教授 檀上博史

機能をもつ新しい超分子化合物群を創製し、その構造と機能を解析する。また、得られた化合物を利用することで、超分子ポリマーを始めとするさまざまな機能性高次構造体を作製し、種々の物性をもつ新規ナノ材料開発を行う。

固体構造化学

顕微鏡法、回折法を利用した局所構造解析

准教授 内藤宗幸

X線や電子線を利用した回折結晶学的物質構造研究を行っている。また、透過電子顕微鏡法を用いた極微領域での組織観察や電子状態分析を行うことで、材料における化学・物理特性発現機構を明らかにし、新規機能性材料設計に展開する研究に取り組んでいる。

光エネルギー変換材料化学

光機能性無機材料の合成と評価

教授 池田茂

半導体太陽光エネルギーを電気エネルギーや化学エネルギーに変換する新たな光機能性材料の合成と評価に関する研究を行っている。とくに、化学が得意とする非真空ウエットプロセスを利用した無機化合物半導体の合成を中心に研究を進めている。

構造有機化学

有機結晶性材料の構造・機能性評価

准教授 片桐幸輔

優れた機能をもつ分子は美しい構造である。リン原子を含む有機分子を基本構造としてもつ、大環状、カゴ型、カプセル型超分子化合物および希土類多配位高分子を創製し、その結晶構造解析および機能性評価を行う。

界面・コロイド化学

微粒子や分子の界面吸着の物理化学

准教授 村上良

コロイド分散系、特に分散質・分散媒が共に流体である系を、ナノ・マイクロサイズの微粒子や界面活性剤の流体界面吸着に基づき安定化する研究を行っている。また微粒子の界面吸着に関連して、固体基板上での液体の濡れ性の制御について検討している。

生物学専攻

分野

修士課程

植物細胞生物学

生化学

植物細胞工学

細胞遺伝学

系統分類学

微生物学

博士後期課程

発生生物学

生体調節学

細胞生物学

修士課程

生物学の基礎・ 応用力を養う

生物学専攻は1964年に開設されました。私立大学での大学院生物学専攻は、全国でも希有な存在であり、その伝統をベースに、新しい生命科学の思考と技術を取り入れた独創的・先端的研究を行っています。研究分野は9つあり、物質から細胞、個体、生態、さらに時空を越えた進化までを網羅する、発生生物学、系統分類学、植物細胞工学、細胞遺伝学、生化学、生体調節学、微生物学、細胞生物学、植物細胞生物学を設置。それぞれの分野では、基礎のみならず応用分野も視野に入れた研究・教育を展開しています。

充実した研究環境で 学ぶ

設備面では、最新の分子測定装置、遺伝子解析装置、電子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、多様な生物の飼育・培養施設など、幅広い研究に対応できる実験環境を構築。充実した研究活動を行うことができます。修了後は、博士後期課程への進学、教員、企業の研究・開発や工場の管理部門、製薬会社のMRなど、幅広い分野で活躍しています。

特色

- 植物細胞生物学分野では、環境刺激に対する植物の応答能力を細胞内膜系の動態に注目して探っています。
- 発生生物学分野では、ゲノム情報や遺伝子機能の解析などによって発生と進化のメカニズムを研究しています。
- 系統分類学分野では、原生生物を対象に系統関係や生態系における役割の解明について研究しています。
- 植物細胞工学分野では、植物におけるスフィンゴ脂質の合成と分解の制御機構を生化学的手法と分子生物学的手法を駆使しながら研究しています。
- 細胞遺伝学分野では、生殖細胞の形成機構の解明を目指して、遺伝子、細胞レベルの解析を行っています。
- 生化学分野では、分子シャペロンを中心に、タンパク質の構造・機能相関の理解を目指し、研究を行っています。
- 生体調節学分野では、動物がどのように温度を感知し記憶・適応するかについて、その遺伝子システムを解析しています。
- 微生物学分野では、真核微生物をモデルとして、細胞の栄養感知と増殖制御機構との関連を、遺伝学・生化学的手法を用いて研究しています。
- 細胞生物学分野では、社会性ハチ目昆虫の生態や行動を支える分子メカニズムを明らかにするために、生態学、組織形態学、分子生物学的手法などを用いて研究しています。
- 各分野とも遺伝子組換え技術などの先端的分析法を駆使して研究を行っています。また、各分野で連携し合い、研究成果を論文発表や国際学会での招待講演として発信しています。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

発生生物学

動物の発生と進化に関する研究

教授 日下部 岳 広

脳や感覚器官がどのようなしくみで作られ、機能するのかを、発生過程の観察や操作が容易で、遺伝情報も詳しく解明されているホヤとメダカを主なモデル生物として研究を進めている。脊椎動物の起源や、脳や眼がどのように進化してきたのかという謎にも迫ろうとしている。

植物細胞工学

植物の代謝と環境応答に関する研究

教授 今井 博之

植物の環境や季節の変化に応じて生体膜の脂質の含量や組成を変える。このような生体膜脂質の可塑性の生物学的機能を明らかにするため、スフィンゴ脂質代謝関連酵素の遺伝子発現制御の観点から研究している。

生化学

タンパク質の機能および構造に関する研究

教授 渡辺 洋平

タンパク質は独自の立体構造を形成することで、はじめてその機能を発揮することができる。生体内では分子シャペロンと呼ばれる一群のタンパク質が、様々なタンパク質の立体構造形成を助けている。こうした分子シャペロンの働きを分子レベルで解明することをめざして研究を進めている。

微生物学

栄養応答と細胞増殖制御に関する研究

准教授 武田 鋼二郎

栄養代謝制御や細胞内タンパク質分解機構と細胞分裂の制御機構との関連性について、分裂酵母をモデル生物として用いて研究している。具体的には、窒素源や炭素源の量に応じた細胞分裂制御やユビキチン依存的タンパク質分解の調節を分子レベルで解明することを目指している。

植物細胞生物学

植物の細胞内膜系動態と環境応答に関する研究

准教授 上田 晴子

植物は常に変化する環境条件（光・重力・虫害など）に適応しながら生きている。このような適応能力を生み出すしくみを、小胞体を中心とした細胞内膜系の分化、およびアクチン・ミオシンIIを中心とした細胞骨格の動態の解析から明らかにすることを目指している。

系統分類学

原生生物を中心とした系統進化に基づく分類および生態に関する研究

教授 本多 大輔

微細藻類や原生動物など、特に単細胞の真核生物の系統進化および分類。対象生物を野外から採集することを第一歩とし、細胞形態および構成物質の比較、分子系統解析などから進化的位置づけを行う。また、これらの生物が環境生態系に果たす役割の解明についてもテーマとしている。

細胞遺伝学

動物の生殖細胞形成を制御する分子機構に関する研究

教授 向 正則

多細胞生物において生殖細胞は遺伝情報を次世代に伝える重要な働きをもつ。モデル生物であるショウジョウバエを材料として、生殖細胞中の遺伝子発現制御機構、生殖細胞の分化機構、減数分裂の制御機構、生殖細胞とそれを取り囲む体細胞との相互作用に関する研究を遺伝子レベルで進めている。

生体調節学

感覚応答と生体調節に関する研究

教授 久原 篤

動物がどのように環境温度を感じ生体の調整をおこなっているのかを解き明かすために、線虫C.エレガンスをつかって研究している。具体的には、線虫の温度に対する応答に着目して、(1)動物の感覚情報処理のメカニズムや、(2)環境変化への生体適応のメカニズムを解き明かそうとしている。

細胞生物学

昆虫の生態と機能に関する研究

准教授 後藤 彩子

女王アリは、羽化直後の交尾で受け取った精子を寿命が続く限り貯蔵する。アリの多くの種の女王の寿命は10年以上と、昆虫としては例外的に長寿のため、精子貯蔵期間も極端に長い。この驚くべき能力を分子レベルで解明しようとしている。

生命・機能科学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

環境・資源科学

分子生命科学

エネルギー科学

細胞生命科学

博士後期課程

化学と生物学の複合領域を扱う

最近の科学技術は、専門分野の理論や技術の細分化が進む一方で、複合領域や境界領域の開拓および総合化の傾向を強くしています。このような学問の変革に積極的に対応すべく、化学専攻と生物学専攻の各修士課程を母体に、化学と生物学の有機的複合領域の分野を開拓・深化することを目的として1990年に設置されたのが本専攻です。

創造性と高い学識・技術を有する人材の育成

現在、4つの研究分野を設け、最先端の研究を推進するとともに、その研究成果に基づいた創造性豊かな、高い学識および技術を有する人材の育成を教育目標としています。

特色

- 研究分野としては、環境・資源科学、エネルギー科学、分子生命科学および細胞生命科学の4つの分野を設けています。
- 社会的要請である新素材開発、環境保全、バイオテクノロジーなどの高度な研究開発を実施しています。
- 研究成果は、学会などを通じて広く社会に還元させることが期待されています。
- 本専攻の修了者は国内外の大学および企業などでの研究者として社会で広く活躍しています。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

博士後期課程

環境・資源科学

環境や資源の問題に対して、「物質とその機能」という考え方を基軸とした、環境物質の計測、資源リサイクル、環境・資源科学、省資源合成法、環境浄化法などの研究

教授 茶山 健二

配位原子として酸素、硫黄、窒素原子を含む有機試薬を合成し、金属イオンの溶媒抽出挙動を研究している。2相間分配挙動をマイクロチップなどの微小空間で行った場合、どのような効果が得られるかを検討している。

教授 檀上 博史

分子認識機能をもつ新しい超分子化合物群を創製し、その構造と機能を解析する。また、得られた化合物を利用することで、超分子ポリマーや兀積層構造体を始めとする、さまざまな機能性高次構造体を作製し、種々の物性をもつ新規ナノ材料開発を行う。

准教授 木本 篤志

有機電子材料化学について研究を推進している。具体的には、金属集積部位を導入した有機-無機ハイブリッド型 π 共役高分子の創製、分子技術を基盤とした環境適合プロセスのための新材料の自己組織化能の評価を行い、有機薄膜太陽電池などの有機電子素子への応用をめざしている。

教授 山本 雅博

固体表面や固体-液体界面、さらには液体-液体界面の構造やその場での化学反応について、実験と理論の両面から研究を行っている。具体的には金属の清浄表面や電極-電解質溶液界面、電解質溶液中の単独イオン量を検討している。

准教授 内藤 宗幸

物質のナノ組織やナノ構造体における原子位置・原子種、原子結合状態・電子状態ならびにそれらの温度、時間変化などについて、特に電子線を用いた高精度の評価・解析を行うことにより、新規機能性材料・デバイス創製に展開する研究に取り組んでいる。

エネルギー科学

各種エネルギーの貯蔵、変換、制御について、これらを支える「物質」と「機能」という基礎化学的な観点からの研究

教授 町田 信也

固体内であるにも関わらず、イオンが高速で移動することのできる新規イオン伝導体の合成およびイオン伝導現象の基礎的研究。さらにこれらイオン伝導現象を利用した全固体型リチウムイオン二次電池の開発。

教授 岩月 聡史

溶液内で起こるさまざまな化学反応について、精密な熱力学的・速度論的解析により反応機構を解明している。また、分子構造や電子状態と反応性との相関を解明することにより、高性能な機能分子の設計・開発に展開している。

准教授 村上 良

気体や液体から成る流体界面を過剰なエネルギーを有する場として捉え、ナノ・マイクロサイズの微粒子や界面活性物質を流体界面に集積させる研究を行っている。微粒子や界面活性物質の自己組織化膜の特性を制御し、エマルジョンや泡などの分散系の安定化に取り組んでいる。

教授 渡邊 順司

高分子鎖の分子運動性に基づく能動的な物質輸送や接着界面の創製、表面微細構造の構築に応用できる革新的材料創製プロセスを開拓し、バイオマテリアルとしての応用に向けた成形加工学を提唱する。

教授 池田 茂

半導体太陽光エネルギーを電気エネルギーや化学エネルギーに変換する新たな光機能性材料の合成と評価に関する研究を行っている。とくに、化学が得意とする非真空ウェットプロセスを利用した無機化合物半導体の合成を中心に研究を進めている。

准教授 片桐 幸輔

優れた機能をもつ分子は美しい構造である。リン原子を含む有機分子を基本構造としてもつ、大環状、カゴ型、カプセル型超分子化合物および希土類多孔性配位高分子を創製し、その結晶構造解析および機能性評価を行う。

分子生命科学

DNA に始まる遺伝情報の発現が、高分子の機能と集合を規制し、生命という属性を表現していく過程を研究

教授 日下部 岳 広

脳や感覚器官がどのようなしくみで作られ、機能するのかを、発生過程の観察や操作が容易で、遺伝情報も詳しく解明されているホヤとメダカを主なモデル生物として研究を進めている。脊椎動物の起源や、脳や眼がどのように進化してきたのかという謎にも迫ろうとしている。

教授 渡 辺 洋 平

タンパク質は独自の立体構造を形成することで、はじめてその機能を発揮することができる。生体内では分子シャペロンと呼ばれる一群のタンパク質が、様々なタンパク質の立体構造形成を助けている。こうした分子シャペロンの働きを分子レベルで解明することをめざして研究を進めている。

教授 本 多 大 輔

微細藻類や原生動物など、特に単細胞の真核生物の系統進化および分類。対象生物を野外から採集することを第一歩とし、細胞形態および構成物質の比較、分子系統解析などから進化的位置づけを行う。また、これらの生物が環境生態系に果たす役割の解明についてもテーマとしている。

教授 久 原 篤

動物がどのように環境温度を感じ生体の調整をおこなっているのかを解き明かすために、線虫C.エレガンスをつかって研究しています。具体的には、線虫の温度に対する応答に着目して、(1)動物の感覚情報処理のメカニズムや、(2)環境変化への生体適応のメカニズムを解き明かそうとしています。

細胞生命科学

細胞における情報の認識や発現機構を、代謝調節の機構や機能物質の構造と機能という観点からの生理化学的研究

教授 今 井 博 之

植物は環境や季節の変化に応じて生体膜の脂質の含量や組成を変える。このような生体膜脂質の可塑性の生物学的機能を明らかにするため、スフィンゴ脂質代謝関連酵素の遺伝子発現制御の観点から研究している。

准教授 武 田 鋼 二郎

栄養代謝制御や細胞内タンパク質分解機構と細胞分裂の制御機構との関連性について、分裂酵母をモデル生物として用いて研究している。具体的には、窒素源や炭素源の量に応じた細胞分裂制御やユビキチン依存的タンパク質分解の調節を分子レベルで解明することを目指している。

准教授 上 田 晴 子

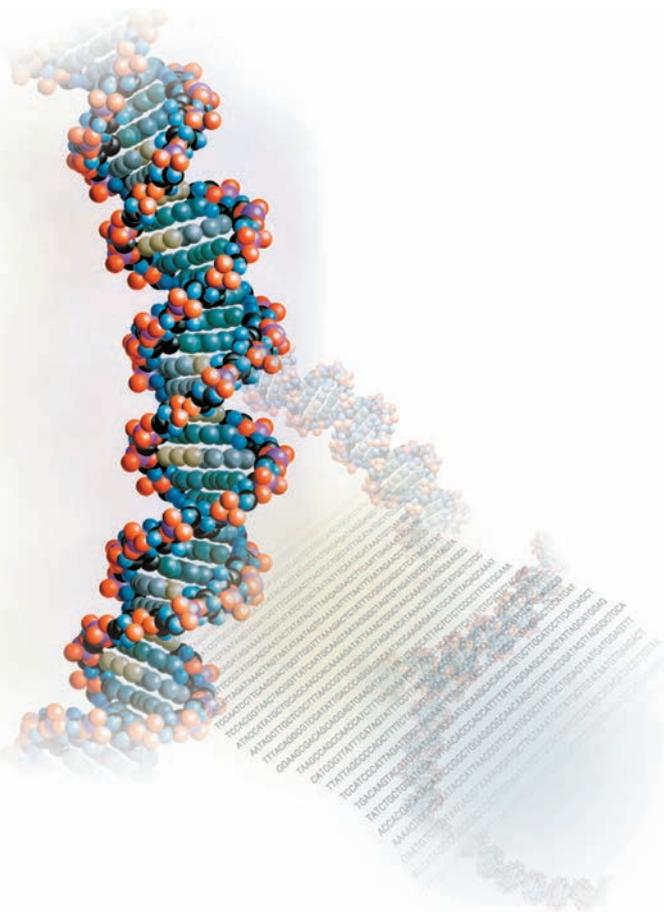
植物は常に変化する環境条件（光・重力・虫害など）に適応しながら生きている。このような適応能力を生み出すしくみを、小胞体を中心とした細胞内膜系の分化、およびアクチン・ミオシンXIを中心とした細胞骨格の動態の解析から明らかにすることを目指している。

教授 向 正 則

多細胞生物において生殖細胞は遺伝情報を次世代に伝える重要な働きをもつ。モデル生物であるショウジョウバエを材料として、生殖細胞中の遺伝子発現制御機構、生殖細胞の分化機構、減数分裂の制御機構、生殖細胞とそれを取り囲む細胞との相互作用に関する研究を遺伝子レベルで進めている。

准教授 後 藤 彩 子

女王アリは、羽化直後の交尾で受け取った精子を寿命が続く限り貯蔵する。アリの多くの種の女王の寿命は10年以上と、昆虫としては例外的に長寿のため、精子貯蔵期間も極端に長い。この驚くべき能力を分子レベルで解明しようとしている。



知能情報学専攻

分野

修士課程

Webコミュニケーション ヒューマンインテリジェンス
マシンインテリジェンス

博士後期課程

情報構造 知能システム

修士課程

博士後期課程

知能情報学を究める

本専攻は、知能情報学部知能情報学科を母体とし、知能情報学部がカバーする広範囲な「情報通信」「人間知」「機械知」についての高度な教育・研究を目標としています。

本専攻は、高度情報化社会の到来により、高度な情報科学・システム科学の教育・研究の必要性が高まり、修士課程が1993年に、博士後期課程が1995年に設置された情報・システム科学専攻を祖とし、情報システム工学専攻を経て、2012年より知能情報学専攻として新たなスタートを切りました。

本専攻では、知能情報学の基礎分野から応用分野までの高度な専門的学問を修得し、柔軟な応用力と個性豊かな創造性を発揮して社会に貢献し、問題解決に必要な知識、高度な技術を有する人材育成をめざします。

高度な知能情報学の知識を有する人材を養成

本専攻及び本専攻の前身である情報・システム科学専攻と情報システム工学専攻の修了者の多くは、企業の研究・開発部門あるいは情報処理関連部門に就職し、また大学の情報関連学部の教員、中学校・高等学校の数学教諭としても活躍しています。

特色

修士課程研究分野

- 「Webコミュニケーション」では、マルチメディア情報ネットワーク、コンピュータシステムの並列化、Webコンピューティング、数式処理システム、ソフトウェア工学など高度な情報処理・通信技術に関する研究を行います。
- 「ヒューマンインテリジェンス」では、知覚・感覚とそれらのモダリティの生体情報処理と知的情報システム、音声・音響情報処理、立体映像、トポロジー、代数学と数学教育などの研究を行います。
- 「マシンインテリジェンス」では、計算知能、ソフトコンピューティングによる知能システムのためのモデル化、画像処理の知能化、学習、最適化、認識、知能ロボット、バーチャルリアリティ、自然言語処理などの研究を行います。

博士後期課程研究分野

- 「情報構造」では、多様な情報概念が指示する意味内容を情報構造という視点から研究することにより、情報の本質を解明します。主な研究領域は感性情報、情報通信ネットワーク、数理構造、情報検索です。
- 「知能システム」では、人間活動にも関わる大規模、複雑化した諸問題をシステム科学的に考究し、問題指向的な理論の構築と情報処理手法を開発します。主な研究領域は、多目的システム、知的システム設計、知能情報システム科学、知的画像処理、計算機アーキテクチャ、立体映像システムです。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

Webコミュニケーション

「Webコミュニケーション」では、マルチメディア情報ネットワーク、コンピュータシステムの並列化、Webコンピューティング、数式処理システム、ソフトウェア工学など高度な情報処理と通信技術とその応用に関する研究を行います。

教授 岳 五一

コンピュータネットワーク、情報通信システムなど、情報化社会を支える各種情報通信システムの高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究を行う。特にマルチメディア情報通信ネットワーク、モバイル通信ネットワークのモデル化、ネットワークシステムの最適化、性能解析および評価を行う。

教授 若谷 彰良

多くのアルゴリズムは、並列、並行処理により高速化および時間制約の実現が図られている。本研究室では、並列ハードウェアおよび並列ソフトウェアの立場から考察を加え、新規アーキテクチャ、アルゴリズムの提案および実証を行う。

准教授 新田 直也

ソフトウェアの保守・再利用を促進するため、フォワードエンジニアリングの観点からソフトウェアの設計手法に関する研究、リバースエンジニアリングの観点からソフトウェアの静的・動的解析手法に関する研究を行っている。

教授 松本 茂樹

パターン認識や画像処理において現れる種々の「情報」をヒルベルト空間などの関数空間の点として捉えて解析していく関数解析的思考法・探求法を、特に調和解析の手法を基調にして研究する。すなわち、「情報理論を深部で律する代数構造」の研究がテーマである。

教授 灘本 明代

次世代のインターネットのコンテンツに関する研究を行っている。具体的には(1)次世代検索システムに関する研究、(2)ソーシャルメディアを対象としたデータマイニング、(3)Webを用いた漫才台本自動生成の研究を行っている。

准教授 関 和広

大規模データを対象にした分散並列型のデータマイニングアルゴリズムに関する研究、時系列データおよび時系列テキストからの情報抽出、知識獲得、因果関係分析、未来予測などに関する研究を行っている。

ヒューマンインテリジェンス

「ヒューマンインテリジェンス」では、知覚・感覚とそれらのモダリティの生体情報処理と知的情報システム、音声・音響情報処理、立体映像、トボロジー、代数学と数学教育などの研究を行います。

教授 森元 勘治

我々が住む宇宙空間は、3次元多様体と呼ばれる図形である。その3次元空間の中で、複雑に絡んだ結び目から必要な情報を取り出し、結び目の真の複雑さを図る結び目理論。そして、空間そのものの研究である3次元多様体論を、位相幾何学的に研究している。

教授 北村 達也

音声の生成と知覚のメカニズムに関する研究を行う。中心的な研究テーマは、発話のシミュレーション、発話の観測法の開発、音声の個人性（話者の特徴）の知覚要因であり、様々な手法を用いてアプローチする。

准教授 阪本 邦夫

立体映像とインタラクティブメディアの研究を行う。立体映像の知覚および映像表現に関する人間の視覚情報処理機構について実験的な研究を行うとともに、立体映像表示に関連するディスプレイ装置の開発や、立体映像とマルチメディアを活用したインタラクションシステムの構築などを行う。

教授 高橋 正

計算代数と数学教育の研究を行っている。計算代数の研究では、数学的对象を計算機上に表現し、代数演算を行うことにより数学的に明確な意味をもつ結果を得ることを研究している。数学教育の研究としては、情報処理心理学に基づいた認識と数理構造に関する研究を行っている。

准教授 前田 多章

生体の認知機構を、電気生理学的実験および行動実験により研究するとともに、これらの研究により得られた知見を健康科学分野に応用する。(1)注意・記憶に関する研究。(2)情動の制御機能に関する研究。(3)睡眠科学に関する研究。

准教授 山中 仁寛

人間の知覚、認知のプロセスの中での情報処理機構や生理状態の特徴と人間の振る舞いの関係を明らかにする研究を行う。研究を通じて、作業者の状態推定法の開発、ヒューマンエラーの未然防止策や人間中心設計システムへの応用に取り組んでいる。

マシンインテリジェンス

「マシンインテリジェンス」では、計算知能、ソフトコンピューティングによる知能システムのためのモデル化、画像処理の知能化、学習、最適化、認識、知能ロボット、バーチャルリアリティ、自然言語処理などの研究を行います。

教授 田中 雅博

深層学習を含む機械学習、進化型アルゴリズムなどの人工知能応用研究を行っている。また、キネクト、レーザースキャナなどの視覚センサーを用いて、身体動作や機能などの計測・評価システムを開発している。

教授 田村 祐一

バーチャルリアリティ(VR)システムの基礎・応用研究を行っている。特に、視覚と触覚に関するVRデバイスの開発およびそのデバイスを使った数値情報提示などの研究を進めている。

准教授 和田 昌浩

非線形システムに見られるカオス現象の解析やその特徴を利用した工学システムなどへの応用について研究を行う。また、カオスを利用したセキュリティ技術や電子透かし技術、CNNを用いた画像処理、非線形時系列処理、ロボット関連などについても研究を行っている。

准教授 永田 亮

計算言語学と自然言語処理の研究を行っている。具体的には、(1)英文の誤り検出と自動添削、(2)ノイズを含む文章の解析、(3)大量の文書からの言語知識の発見などに取り組んでいる。企業との共同研究により考案した技術の実用化にも積極的に取り組んでいる。情報科学、言語学、心理学などに関連した学際的な分野である。

教授 渡邊 栄治

階層型ニューラルネットワークの学習法と画像処理、特に、画像処理による人間の動作の分析に取り組んでいる。具体的には、(1)読む動作や書く動作の検出とその分析、(2)画像処理をベースにした手書きノートの知能化などに取り組んでいる。

教授 小出 武

オペレーションズ・リサーチ、特に在庫管理に関する研究を行っている。最適手法や統計手法、シミュレーションなどを用いて、製造業や販売業における在庫管理業務を最適に遂行するための支援システムの構築に取り組んでいる。

准教授 梅谷 智弘

「ロボット」を広くとらえ、ロボットに関する要素技術を用いたシステム統合に関する基礎・応用研究を行っている。特に、ロボット周囲の作業環境の整備手法に着目した作業の知能化、高度化に関する研究開発を進めている。



情報構造

「情報構造」では、多様な情報概念が指示する意味内容を情報構造という視点から研究することにより、情報の本質を解明します。主な研究領域は感性情報、情報通信ネットワーク、数理構造、情報検索です。

教授 岳 五 一

コンピュータネットワーク、情報通信システムなど、情報化社会を支える各種情報システムの高度化と知能化を目指した理論と応用の両面にわたる研究を行う。特にマルチメディア情報通信ネットワーク、モバイル通信ネットワークのモデル化、パラメータの最適化、システムの性能解析および評価を行う。

教授 森 元 勘 治

我々が住む宇宙空間は、3次元多様体と呼ばれる図形である。その3次元空間の中で、複雑に絡んだ結び目から必要な情報を取り出し、結び目の真の複雑さを図る結び目理論。そして、空間そのものの研究である3次元多様体論を、位相幾何学的に研究している。

教授 灘 本 明 代

次世代のインターネットのコンテンツに関する研究を行っている。具体的には(1)次世代検索システムに関する研究、(2)ソーシャルメディアを対象としたデータマイニング、(3)Webを用いた漫才台本自動生成の研究を行っている。

教授 小 出 武

オペレーションズ・リサーチ、特に在庫管理に関する研究を行っている。最適化手法や統計手法、シミュレーションなどを用いて、製造業や販売業における在庫管理業務を最適に遂行するための支援システムの構築に取り組んでいる。

教授 松 本 茂 樹

パターン認識や画像処理において現れる種々の「情報」をヒルベルト空間などの関数空間の点として捉えて解析していく関数解析的思考法・探求法を、特に調和解析の手法を基調にして研究する。すなわち、「情報理論を深部で律する代数構造」の研究がテーマである。

教授 高 橋 正

計算代数と数学教育の研究を行っている。計算代数の研究では、数学的対象を計算機上に表現し、代数演算を行うことにより数学的に明確な意味をもつ結果を得ることを研究している。数学教育の研究としては、情報処理心理学に基づいた認識と数理構造に関する研究を行っている。

教授 北 村 達 也

音声の生成と知覚のメカニズムに関する研究を行う。中心的な研究テーマは、発話のシミュレーション、発話の観測法の開発、音声の個人性（話者の特徴）の知覚要因であり、様々な手法を用いてアプローチする。

准教授 新 田 直 也

大規模ソフトウェアの静的構造および動的構造を数理的に解析し、ソフトウェアの保守・再利用作業の支援を行う技術の研究を行っている。

知能システム

「知能システム」では、人間活動にも関わる大規模、複雑化した諸問題をシステム科学的に考究し、問題指向的な理論の構築と情報処理手法を開発します。主な研究領域は、多目的システム、知識システム設計、知能情報システム科学、知的画像処理、計算機アーキテクチャ、立体映像システムです。

教授 田 中 雅 博

深層学習を含む機械学習、進化型アルゴリズムなどの人工知能応用研究を行っている。また、キネクト、レーザースキャナなどの視覚センサーを用いて、身体動作や機能などの計測・評価システムを開発している。

教授 若 谷 彰 良

多くのアルゴリズムは、並列、並行処理により高速化および時間制約の実現が図られている。本研究室では、並列ハードウェアおよび並列ソフトウェアの立場から考察を加え、新規アーキテクチャ、アルゴリズムの提案および実証を行う。

准教授 阪 本 邦 夫

立体映像とインタラクティブメディアの研究を行う。立体映像の知覚および映像表現に関する人間の視覚情報処理機構について実験的な研究を行うとともに、立体映像表示に関連するディスプレイ装置の開発や、立体映像とマルチメディアを活用したインタラクションシステムの構築などを行う。

准教授 前 田 多 章

生体の認知機構を、電気生理学の実験および行動実験により研究するとともに、これらの研究により得られた知見を健康科学分野に応用する。(1)注意・記憶に関する研究。(2)情動の制御機能に関する研究。(3)睡眠科学に関する研究。

教授 渡 邊 栄 治

階層型ニューラルネットワークの学習法と画像処理、特に、画像処理による人間の動作の分析に取り組んでいる。具体的には、(1)読む動作や書く動作の検出とその分析、(2)画像処理をベースにした手書きノートの知能化などに取り組んでいる。

教授 田 村 祐 一

バーチャルリアリティ(VR)システムの基礎・応用研究を行っている。特に、視覚と触覚に関するVRデバイスの開発およびそのデバイスを使った数値情報の提示などの研究を進めている。

准教授 和 田 昌 浩

非線形システムに見られるカオス現象の解析やその特徴を利用した工学システムなどへの応用について研究を行う。また、カオスを利用したセキュリティ技術や電子透かし技術、CNNを用いた画像処理、非線形時系列処理、ロボット関連などについても研究を行っている。

准教授 梅 谷 智 弘

「ロボット」を広くとらえ、ロボットに関する要素技術を用いたシステム統合に関する基礎・応用研究を行っている。特に、ロボット周囲の作業環境の整備手法に着目した作業の知能化、高度化に関する研究開発を進めている。

Graduate School of Social Science

社会科学研究科

経済学専攻

- ・研究コース
- ・税理コース
- ・社会人コース

経営学専攻

- ・経営学コース（修士課程のみ）
- ・ビジネスコース（修士課程のみ）
- ・博士後期課程



大学院社会科学研究科は、経済学部と経営学部を基礎とし、経済学専攻（修士課程のみ）と経営学専攻（修士課程・博士後期課程）の2専攻を設置しています。経済学専攻は、研究、税理、社会人の3コースから構成され、経営学専攻は、経営学、ビジネスの2コース（修士課程）から構成されています。いずれの専攻も、徹底した少人数体制のもとで研究指導・学修指導を行っており、先端かつ広範な研究・学修が可能となるようなカリキュラムを編成しています。

本研究科では、一般入試（経済学専攻・経営学専攻は共に2回）のほかに、ビジネスマンなどの学位取得を支援するため、社会人入試（経済学専攻、経営学専攻共に9月と2月の2回）、AO入試（経営学専攻のみ9月、2月、3月の3回）も実施しています。

本研究科では、公認会計士・税理士などの国家試験にも対応した科目が準備されており、修了者は研究職、公務員、専門職（公認会計士・税理士）など、社会のさまざまな分野で活躍しています。

経済学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

経済学原論 経済学史 財政学 租税法 計量経済学 国際経済学 社会思想史
労働経済学 ファイナンス論 企業組織論 環境経済学 国際金融論
都市政策論 公共経済学 社会保障財政 経済史 産業経済学 公共政策

修士課程

激変する経済社会に 対応できる能力を養う

1965年に開設された経済学専攻は、2004年に研究者や公務員・教員をめざす方向けの研究コースと税理士などの国家試験や資格取得をめざす方向けの税理コースを設置し、2006年から知的キャリアアップをめざす社会人向けの社会人コースを新設しました。2007年からはカリキュラムを再編し、各コース共通のカリキュラムの下、基本科目と発展科目に分け、社会人コースは課題研究の提出で修士号取得が可能になりました。変化の激しい経済社会で充実した活動ができるように、広く経済的視野に立ちながら、同時に高度な専門性を必要とする職業に就く人材の育成をめざしています。

フェイス・トゥ・フェイスの 研究指導

本専攻では、徹底した少人数教育で、フェイス・トゥ・フェイスの講義・研究指導を行っています。院生研究室にはパソコンを完備し、図書資料も教員と同等の利用ができ、充実した環境で研究を行うことができます。修了生は、研究者、公務員・教員、税理士など、多彩な分野で活躍しています。

特色

- 研究コースは、財政・金融系、公共経済系、国際経済系、理論・統計・歴史系などの課題から論文を作成し、研究者や公務員・教員などをめざす方が対象です。
- 税理コースは、税理士の資格取得をめざす方が対象で、特に税理士試験において科目免除を可能とする租税法に関する論文の指導に力点をしています。2003年から2018年までの16年間で69名が修了し、国税審議会に税理士試験科目免除申請をした方は全員受理されています。
- 社会人コースは、研究コースと同じカリキュラムで、課題研究の提出で修士号が取得できます。
- 多くの大学院生は、税理士などの国家試験や資格取得をめざしています。特に税理士の資格取得において重要研究分野となる租税法を2名の教員が担当しています。
- 修士課程修了後も研究の継続を希望する大学院生には、論文指導を通じて他大学博士課程への進学指導を実施しています。これまでに、一橋大学、大阪市立大学、兵庫県立大学、神戸大学などの博士後期課程に進学しています。

分野・主要内容・担当教員 研究内容

修士課程

経済学原論

経済予測の研究

教授 稲田 義久

専攻は計量経済学。研究の中心は実証分析である。研究領域としては、世界リンクモデルの開発とシミュレーション分析、環境問題の数量的分析、日本経済モデル（年次・四半期・超短期）の開発、中国計量モデルの開発、地域経済計量モデルの開発とその応用。

経済学原論

マクロ経済学の理論的基礎

教授 寺尾 建

近年のマクロ経済学の分析手法は、格段に洗練されたものとなっている。しかしながら、そのことに応じて、失業・景気循環・経済成長などのマクロ経済現象への理解が深まっているわけではない。このような問題意識の下、マクロ経済理論がその記述力と説明力を増すための要件を明らかにすることを目的として研究に取り組んでいる。

経済学史

現代経済学の源流とその展開

教授 岡田 元浩

労働をめぐる学説史研究と、新古典派、ケインズ派、マルクス派ら現代理論の批判的検討。

財政学

現代日本の財政政策の研究

教授 永廣 顕

日本の財政金融政策の歴史分析が研究テーマ。特に、公的債務管理、財政投融资、社会保障の政策形成過程を解明することを課題としている。

租税法

所得課税法の基礎理論と 関連法の研究

教授 石原 忍

所得課税法の基礎理論と民法との関連を研究する。研究テーマとして、所得がビークル・エンティティを介して構成員に帰属するとき、その所得が持つ本来の性質が変更を受けて構成員に帰属する態様に関心がある。

租税法

租税回避と税法における不確定 概念の研究

教授 竹内 綱敏

租税回避の否認と税法上の不確定概念との関連を研究テーマとする。租税回避を否認するための実定法における不確定概念の解釈・適用に関連する諸問題について、判例分析（ヤフー事件、IBM事件など）を通じて、その今日的意義を研究している。

計量経済学

計量経済モデルの推定・検定

教授 小山 直樹

経済データの統計分析。主として、計量モデル分析の手法を、環境政策の分析に応用、拡張する問題に取り組んでいる。

計量経済学

個人の選択行動の計量分析・ミ クロ計量分析

教授 森 剛志

個人の選択行動の計量分析。個人は常にトレードオフに直面していると経済学では教えられるが、「状況」が変化すると、必ずしも一貫した選択行動をとるわけではない。プロビット・ロジットモデル分析から、マーケティング・環境・医療の分野で幅広く用いられるようになったコンジョイント分析を用いた研究に取り組んでいる。

計量経済学

景気とインフレ期待の計測

教授 村澤康友

(1)「景気」を明確に定義し、観測可能な経済指標の背後にある潜在変数として「景気」を計測する研究 (2)区間を選んで回答するインフレ期待の調査データから、その背後にある真のインフレ期待の分布を計測する研究。

国際経済学

現代アジア経済論

教授 高龍秀

通貨・金融危機を前後するアジア経済の研究。東アジアの奇跡といわれた高度成長はいかにして可能であったのか。なぜ1997年に通貨危機に至ったのか。危機後にアジア各国はどのような経済改革を進め、日本はどう関わろうとしているのか、研究する。

労働経済学

技術変化、グローバル化と所得の不等

教授 上島康弘

情報技術の進展など生産技術の変化や発展途上国からの輸入の増大によって労働需要がどのように変化したのか、また、その変化が所得の平等度とどのような影響を与えたのかを分析しています。

企業組織論

政府規制と企業行動・成果の関係分析

教授 春日教測

経済的規制緩和の進展にもかかわらず、市場には未だに参入規制・料金規制・支配的事業者規制等の規制が必要とされる分野があり、さらには安全面や環境面に配慮するための社会的規制も存在する。こうした規制が企業行動や成果にどのような影響を与えるか等について、データを用いた分析を行っている。

国際金融論

金融リスクマネジメントの数量分析

教授 中島清貴

1つ目は、公的資金注入が企業の信用リスクにどのような影響を与えるのか、信用リスクはどのような経路で伝播していくのか、ということ进行分析している。2つ目は、大恐慌など金融危機時の貨幣に対する需要行動を分析している。3つ目は、日本人と米国人、そして中国人の経済活動の場における集団主義を比較分析している。

公共経済学

公共的課題の経済分析

教授 中川真太郎

公共的課題とは、個々の経済主体だけでは解決できない集団共通の利害に関する問題である。地域の防災・地球環境の改善・国際社会の平和といった問題は公共的課題としての一面があり、これらの問題に対して公共経済学の公共財理論を用いて主として理論的な分析に取り組んでいる。

経済史

アジア経済の歴史

准教授 平井健介

(1)日本植民地経済。日本との関係でのみ捉えられてきた植民地経済の展開について、日本以外のアジア地域や現地社会の役割を考察することで、再検討する。(2)アジア経済史。近代アジア諸地域における相互連関のあり方を、ヒト・モノ・カネ・情報の視点から考察する。

公共政策

公共政策のデザインと実行に関する研究

准教授 林亮輔

グローバル化の進展、少子高齢化の進行、東京一極集中などの環境変化により、地域経済は弱体化するとともに、地方の財政状況も悪化している。地域経済・地方財政を再生させるためには、政策が科学的基準に依拠するとともに、適切な政策評価が実施されなければならない。以上の問題意識を背景に、これからの公共政策に求められる姿について研究している。

国際経済学

現代国際経済システムの理論・実証分析

教授 青木浩治

人・モノ・金・情報のあらゆる面で相互依存を拡大・深化させつつある国際経済を分析対象とし、特に国際経済と日本の関わりならびにその役割を研究している。最近では主として東アジア経済を分析対象として、その貿易・投資・金融の仕組みを研究している。

社会思想史

18世紀ナポリ啓蒙の研究

教授 奥田敬

通時的には古典古代以来の地中海世界における〈市民〉的な政治思想の系譜を踏まえ、共時的には近代ヨーロッパ世界における〈文明〉論的な社会経済思想の交流と対抗を背景として、「ジェノヴェージ的伝統」の実態を解明する。

ファイナンス論

計量ファイナンス

教授 石田功

金融時系列の統計的モデリング、資産価格理論の実証とその資産運用・リスク管理への応用を研究している。特に、高頻度データを用いた株式・為替市場のボラティリティ時系列のモデリングと予測を研究している。

環境経済学

環境政策の費用便益分析

教授 柘植隆宏

費用便益分析を用いて、環境政策を効率性の観点から評価することに取り組んでいる。現在は特に、環境改善の便益や環境悪化の費用を貨幣単位で評価するための手法である環境評価手法（トラベルコスト法、仮想評価法(CVM)、コンジョイント分析など）の洗練化を研究テーマとしている。

都市政策論

都市空間の経済分析

教授 石川路子

人や企業の様々な経済活動を都市空間の観点から実証的に分析し、地域や都市の活性化策を模索している。各地域が抱える医療や福祉、防災、教育といったソフト面から住宅、交通ネットワークなどのハード面での課題まで、空間的な特性を踏まえたデータから洗い出し、経済学的に分析している。

社会保障財政

財源と給付の経済学

准教授 足立泰美

専門は社会保障財政である。租税と社会保障負担をはじめ、年金・医療・介護政策および雇用・婚姻・出産・子ども子育て政策をテーマに、基礎自治体データ、家計のマイクロデータならびにレセプトデータなどを用いて、シミュレーション分析と計量分析で実証的に検証を行っている。

産業経済学

ネットワーク産業の経済分析

准教授 林健太

インターネットにまつわる諸問題を取り扱う。具体的には、インフラ整備やネットワーク中立性といったハード面の課題だけではなく、最近ではその情報網を流れるコンテンツに関する著作権や情報リテラシー教育など、ソフト面にも関心がある。

経営学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

経営学 経営史 経営管理論 経営戦略論 経営財務論 経営組織論
 アジア経営論 経営科学 経営労務論 企業会計論 財務諸表論 原価計算
 管理会計 監査論 情報会計システム論 税務会計 国際会計論
 マーケティング・サイエンス マーケティング管理論 金融論 証券論

少人数教育の実施

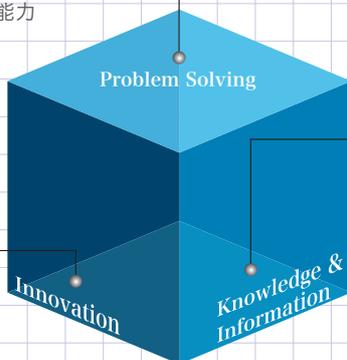
修士課程では、社会人を対象にビジネスコースも開講し、修士（経営学）の学位取得を支援しています。また、修士課程は厚生労働省の教育訓練給付制度指定講座でもあります。入学定員は、修士課程（経営学コース・ビジネスコース）が10名、博士後期課程が3名であり、いずれもきめ細かい少人数教育が行われています。

高度な教育体制を構築

経営学専攻では、時代の先端をいく高度な理論的研究とともに、社会に役立つ実践的な専門教育の実現という理念のもとに、1965年に修士課程が開設され、1971年には博士後期課程が増設されました。専任教員によるマンツーマンの心の通ったきめ細かい指導を実施しており、学部における専門教育をより深く充実させるとともに、広く発展させることができる高度な教育体制を整えています。

問題の認識・解決力を育成する

激しく変化する時代の方向性を見据え、現代日本企業が直面する諸問題を認識、さらに、問題打開のための理論的・実践的能力を育成します。



経営理論を体系的に学修する

最新の経営学の体系に基づいて、高度な専門知識を蓄積、理論を深化させ、あらたな研究フロンティアの開拓をめざします。

実務での革新力を養う

幅広い視野、柔軟な思考など、時代を先取りする革新力養成に重点を置き、社会の最前線で活躍するための応用力を養います。

本専攻では、研究者養成型の一般的な大学院教育だけではなく、高度な専門職業人の育成や生涯学習を目的とした新しい発想の学びの場も提供します。社会の第一線で活躍しながら、より一層のキャリアアップをめざす人、もうひとつのキャリアを探究している人など、社会人の多様なニーズに対応したカリキュラム編成により、学びやすい授業形態を実現するとともに、実業界から経験豊富な講師を多数招聘し、理論だけでなく実践的な知識の修得をめざしています。

修士課程〈経営学コース／ビジネスコース〉

特色

- 経営学専攻は経営学、会計学、商学の3分野(フィールド)から成り、各分野を構成する演習テーマとその授業科目が設けられており、広範な経営学研究が可能となるよう配慮されています。
- カリキュラムは基本・発展・応用の科目群に整備され、現実の経営問題を解決するための革新的・創造的ビジネスパーソン、ビジネスエリートを養成することを主眼においた教育を展開しています。
- 会計学分野では税理士資格の試験科目免除も可能であり、経営学・商学の各分野では高度なビジネス理論や手法のマスターを目標としたカリキュラムが展開されています。
- 学内推薦入学試験制度や社会人入学制度、AO入学試験制度を実施し、門戸を広く開放しています。
- 学界における研究者や、公認会計士・税理士などの高度な専門職に従事している人たちを数多く輩出しています。
- 本学ビジネス・イノベーション研究所で行う産官学連携の21世紀型ビジネスモデルの共同研究に参加できます。

経営学系統

経営学

解決志向マネジメントに関する研究

教授 北居 明

組織文化論と組織開発論の分野で、わが国の組織を対象にアクション・リサーチと実証研究を行っている。特に対話型組織開発と解決志向マネジメントの有効性に関心がある。

経営管理論

組織が機能するしくみに関する研究

教授 奥野 明子

目標管理という管理システムに注目し、組織の中のヒトを管理するしくみを明らかにする。例えば、目標設定、仕事の分配、評価、能力開発や育成、コミュニケーション、報酬管理などが研究の対象である。また、最近では、産休・育休からの復職者の人事評価の研究を行っている。

経営財務論

企業の財務決定や資本政策に関する理論的、実証的研究

教授 馬場 大治

日本企業の資本調達政策に関する理論的、実証的研究。

アジア経営論

「グローバル経営とアジア」に関する研究

教授 杉田 俊明

日本企業や欧米多国籍企業の対アジア・中国への直接投資と現地における経営、華僑華人企業のボーダレス経営、アジア・中国企業の経営とグローバル化などについて、研究を行っている。

経営労務論

人的資源管理とキャリアに関する研究

教授 櫻田 涼子

働き方に関する課題を人的資源管理およびキャリア構築といった組織・個人双方の視点から捉え、理論的・実証的に検討・分析する。

会計学系統

企業会計論

企業会計の理論研究および財務報告制度の実態分析

教授 内藤 文雄

企業会計は組織体の経済活動を認識・測定・評価し、その結果を会計情報としてまとめ、利害関係者に伝達する行為である。この行為の理念・基本的考え方・制度について理論的および実態的な解明を行う。

原価計算

コスト・マネジメントとその隣接領域に関する理論と方法論に関する研究

教授 長坂 悦敬

ITと原価管理、管理会計の関係変化に注目し、とりわけ実際の企業活動におけるコスト・マネジメント、ビジネスプロセス・マネジメント、ナレッジ・マネジメントについての理論、方法論を探究。ITに関わる管理会計の隣接領域を包含した実証研究も行っている。

監査論

情報の信頼性を保証する監査の仕組みに関する研究

教授 伊藤 公一

財務諸表監査は、財務諸表の信頼性を保証するという重要な役割を担っているが、仕組みとしての様々な課題を抱えている。それらの課題について研究を行っている。

経営史

企業の生成発展についての理論的実証的研究。経営行動の経営史的な分析と学際比較をケースに基づいて実証的に検討する

教授 廣山 謙介

日本経営史、経営人類学、塩業史。近世から現代までの経営の変化とその経営史的意義を、所有を中心に解明する。その手法のひとつとして、新分野である経営人類学的手法の導入を試みている。地場・伝統産業としての塩業経営の歴史分析も併行して研究している。

経営戦略論

企業の戦略的提携と、そこでコアとなる経営資源としての知的財産が果たす役割についての研究

教授 マノジュ L. シュレスタ

企業の戦略的提携と、そこでコアとなる経営資源としての知的財産が果たす役割についての研究。知的財産マネジメントに関しては、特に新興国におけるバイオ・食品関連企業の比較を実証的研究を通して行っている。

経営組織論

組織の中の人間行動に関する実証的研究

教授 尾形 真実哉

優れた組織は優れた人材によって構成されている。それゆえ、リーダーシップやモチベーション、キャリア、グループダイナミクス、人材育成など組織の中の人間行動に焦点を当て、インタビュー調査や質問票調査によって得られたデータを分析し、普遍性のある理論の構築を目指している。

経営科学

合理的意思決定の研究

教授 三上 和彦

企業、個人の合理的意思決定について研究する。戦略的状況を分析するためにゲーム理論を用いる。また、意思決定における認知的限界についても検証する。

財務諸表論

企業会計基準、制度会計および財務会計理論の研究

教授 久保田 秀樹

日本の企業会計は、金融商品取引法、会社法および税法の規制を受けている。それらの実体規定および形式規定を担う、企業会計基準、内閣府令、法務省令および財務省令など、そしてそれらの基礎となる財務会計理論について研究する。

管理会計

会計の多様なコンセプトやスキルを調査・研究し、企業経営との関わりを探る

教授 杉山 善浩

管理会計や財務会計などの企業会計に加えて、ファイナンスや組織行動論といった隣接諸領域も活用することで、企業経営のあり方を総合的・多角的に究明する。

情報会計システム論

企業の電子情報開示とIT監査（システム監査）に関する研究。具体的にはXBRL（eXtensible Business Reporting Language）によるビジネスレポーティングやビジネスレポーティングの信頼性保証を検討する

教授 池田 公司

拡張可能なビジネスレポーティング言語（eXtensible Business Reporting Language；XBRL）を用いた会計ディスクロージャーについて理論的・実証的な研究を行う。加えて、XBRLによる会計ディスクロージャーの信頼性保証（IT監査）も取り上げる。

税務会計

法人税を中心とした企業課税の理論と課題に関する研究

教授 古田 美保

法人税は企業にとって大きなコストであり、特に近年においては諸外国との比較上の優位性が重要視される。また、企業課税の政策的利用可能性も課題となっている。そういった現状をふまえ、企業課税の理論と企業行動への影響に関する研究を行っている。

国際会計論

国際会計・財務会計に関するトピックスを取り上げ、理論的・実証的研究を行う

教授 若林 公美

会計基準のグローバル化に関連するトピックスを中心に実証研究を行っている。特に、国際会計基準(IFRS)の導入とその影響に関心を持っている。会計情報には、企業の経済活動が投影されており、新聞等で報道されている逸話的仮説を実際のデータで検証できる点が興味深い。

商学系統

マーケティング・サイエンス

マーケティング・システムの動態性と市場-組織の関係性に関する研究

教授 西村 順二

マーケティング論における基本概念である取引制度を分析単位として、比較制度分析の視点からマーケティング・システムの変動過程、そのダイナミズムを生み出す環境条件、そしてそれらの相互関係を研究する。さらに、その方法論的有効性を検証する。

マーケティング管理論

流通・マーケティングのマネジメントに関する理論的・実証的研究

教授 高室 裕史

流通・マーケティング研究の焦点は他者性と創発性にある。いわゆる「意のままにならない他者」との関係の中で不断に秩序が生成されていく、そのメカニズムをいかに捉えるのか、また、そのマネジメントはいかに可能か、こうした課題に対する理論的・実証的研究に取り組んでいる。

金融論

金融サービス業をめぐる課題と展望について理論的・実証的に研究する

教授 大塚 晴之

具体的には、貨幣論、銀行論、マクロ金融論、ミクロ金融論の研究を行い、個別経済主体の金融行動から金融政策に至るまでの幅広いエリアの分析を行う。

証券論

企業の財務政策と資本市場に関する実証研究

教授 山口 聖

企業の財務政策が企業価値やその後の業績に与える影響や、株価の長期パフォーマンスの検証方法について分析している。

博士後期課程

特色

- 博士後期課程では、修士課程修了者およびそれに相当する学力を有する方を対象に、より高度で複雑な経営現象に関わる問題を理論的・実践的に考究する研究者・実務家を養成します。
- 研究者志望の場合には自立した独創的な研究能力、実務家の場合には深い学識にもとづく卓越した問題解決能力、つまり経営理論あるいは経営実践に関するイノベーション能力が、個別的で丁寧な研究指導のなかで育成されます。
- 企業経営者・役職経験者を対象とし、最短一年でマネジメント・ドクター(博士)が取得できるプログラムを2014年度より開始しています。

経営学系統

経営学

解決志向マネジメントに関する研究

教授 北居 明

組織文化論と組織開発論の分野で、わが国の組織を対象にアクション・リサーチと実証研究を行っている。特に対話型組織開発と解決志向マネジメントの有効性に関心がある。

経営史

企業の生成発展についての理論的実証的研究。経営行動の経営史的分析和学際比較をケースに基づいて実証的に検討する

教授 廣山 謙介

経営史、経営人類学。前近代から現代への経営の変化とその経営史的意義を、家族経営を中心に解明する。その手法のひとつに、新分野である経営人類学的手法の導入を試みている。地場・伝統産業としての窯業経営の歴史分析も併行して研究している。

経営管理論

組織が機能するしくみに関する研究

教授 奥野 明子

目標管理という管理システムに注目し、組織の中のヒトを管理するしくみを明らかにする。例えば、目標設定、仕事の分配、評価、能力開発や育成、コミュニケーション、報酬管理などが研究の対象である。また、最近では、産休・育休からの復職者の人事評価の研究を行っている。

経営戦略論

企業の戦略的提携と、そこでコアとなる経営資源としての知的財産が果たす役割についての研究

教授 マノジュ L. シュレスト

企業の戦略的提携と、そこでコアとなる経営資源としての知的財産が果たす役割についての研究。知的財産マネジメントに関しては、特に新興国におけるバイオ・食品関連企業の比較を実証的研究を通して行っている。

経営財務論

企業の財務決定や資本政策に関する理論的・実証的研究

教授 馬場 大治

日本企業の資本調達政策に関する理論的、実証的研究。

経営組織論

組織の中の人間行動に関する実証的研究

教授 尾形 真実哉

優れた組織は優れた人材によって構成されている。それゆえ、リーダーシップやモチベーション、キャリア、グループダイナミクス、人材育成など組織の中の人間行動に焦点を当て、インタビュー調査や質問票調査によって得られたデータを分析し、普遍性のある理論の構築を目指している。

アジア経営論

「グローバル経営とアジア」に関する研究

教授 杉田 俊明

日本企業や欧米多国籍企業の対アジア・中国への直接投資と現地における経営、華僑華人企業のボーダレス経営、アジア・中国企業の経営とグローバル化などについて、研究を行っている。

経営科学

合理的意思決定の研究

教授 三上 和彦

企業、個人の合理的意思決定について研究する。戦略的状況を分析するためにゲーム理論を用いる。また、意思決定における認知的限界についても検証する。

会計学系統

企業会計論

企業会計の理論研究および財務報告制度の実態分析

教授 内藤 文雄

企業会計は組織体の経済活動を認識・測定・評価し、その結果を会計情報としてまとめ、利害関係者に伝達する行為である。この行為の理念・基本的考え方・制度について理論的および実態的な解明を行う。

財務諸表論

企業会計基準、制度会計および財務会計理論の研究

教授 久保田 秀樹

日本の企業会計は、金融商品取引法、会社法および税法の規制を受けている。それらの実体規定および形式規定を担う、企業会計基準、内閣府令、法務省令および財務省令など、そしてそれらの基礎となる財務会計理論について研究する。

原価計算

コスト・マネジメントとその隣接領域に関する理論と方法論に関する研究

教授 長坂 悦敬

ITと原価管理、管理会計の関係変化に注目し、とりわけ実際の企業活動におけるコスト・マネジメント、ビジネスプロセス・マネジメント、ナレッジ・マネジメントについての理論、方法論を探究。ITに関わる管理会計の隣接領域を包含した実証研究も行っている。

管理会計

会計の多様なコンセプトやスキルを調査・研究し、企業経営との関わりを探る

教授 杉山 善浩

管理会計の情報提供機能に関する研究を行っている。文献の渉猟をとおして理論的な側面を学ぶだけでなく、アンケートやインタビューなどを用いた企業調査による実証分析も実施している。

監査論

情報の信頼性を保証する監査の仕組みに関する研究

教授 伊藤 公一

財務諸表監査は、財務諸表の信頼性を保証するという重要な役割を担っているが、仕組みとしての様々な課題を抱えている。それらの課題について研究を行っている。

情報会計システム論

企業の電子情報開示とIT監査（システム監査）に関する研究。具体的にはXBRL（eXtensible Business Reporting Language）によるビジネスレポーティングやビジネスレポーティングの信頼性保証を検討する

教授 池田 公司

拡張可能なビジネスレポーティング言語（eXtensible Business Reporting Language：XBRL）を用いた会計ディスクロージャーについて理論的・実証的な研究を行う。加えて、XBRLによる会計ディスクロージャーの信頼性保証（IT監査）も取り上げる。

税務会計

法人税を中心とした企業課税の理論と課題に関する研究

教授 古田 美保

法人税は企業にとって大きなコストであり、特に近年においては諸外国との比較上の優位性が重要視される。また、企業課税の政策的利用可能性も課題となっている。そういった現状をふまえ、企業課税の理論と企業行動への影響に関する研究を行っている。

国際会計論

国際会計・財務会計に関するトピックスを取り上げ、理論的・実証的研究を行う

教授 若林 公美

会計基準のグローバル化に関連するトピックスを中心に実証研究を行っている。特に、国際会計基準（IFRS）の導入とその影響に関心を持っている。会計情報には、企業の経済活動が投影されており、新聞等で報道されている逸話的仮説を実際のデータで検証できる点が興味深い。

商学系統

マーケティング・サイエンス

マーケティング論における流通チャンネルの変化や進化に関する諸モデルを考察すると共に、その方法論上の有効性を検討する

教授 西村 順二

マーケティング論における基本概念である取引制度を分析単位とし、この取引の連鎖としての流通チャンネル形成の理論的インプリケーションの考察を行う。そして、それらチャンネル・システムのダイナミズムを生み出す環境条件、その相互関係を研究する。さらに方法論的有效性の検証も行う。

金融論

金融サービス業をめぐる課題と展望について理論的・実態的に研究する

教授 大塚 晴之

具体的には、貨幣論、銀行論、マクロ金融論、ミクロ金融論の研究を行い、個別経済主体の金融行動から金融政策に至るまでの幅広いエリアの分析を行う。

FIRST | Graduate School of Frontiers of Innovative
Research in Science and Technology

フロンティアサイエンス 研究科

生 命 化 学 専 攻



2009年4月に開設されたフロンティアサイエンス研究科(愛称FIRST)は、生命化学専攻(修士および博士後期課程)からなる、1研究科1専攻の大学院であり、母体となるフロンティアサイエンス学部からの一貫した少人数教育を背景に、「ナノバイオテクノロジー」および「生命化学」の基礎から応用までを、個人の興味のベクトルに応じて学ぶことができます。本研究科は、社会が求める「ナノバイオテクノロジー」「生命化学」という新しい学問分野を対象とし、それを学ぶには最適といえる日本有数のバイオメディカルクラスター地域であるポートアイランドに立地しています。そのため、近隣の研究所や大学、企業との連携により実践的な能力も身につけることができることから、将来は研究者・技術者、産業界のリーダーとして活躍する即戦力の人材の育成をめざしています。本研究科には最新の研究設備が設置されており、例えば、電子顕微鏡、X線光電子分光装置、超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置、電子スピン共鳴装置、質量分析装置、遺伝子分離解析システム、ゼータ電位測定装置、各種分光分析装置など、科学の様々な分野の研究に対応できる機器が備えられています。本大学院修了者は、研究・開発職、教育、製薬など社会のさまざまな分野で活躍しています。

生命化学専攻

分野

修士課程

博士後期課程

ナノバイオサイエンスグループ

ナノサイエンスグループ

バイオサイエンスグループ

修士課程

博士後期課程

社会が求める新しい領域を研究

生命化学専攻は、社会的注目度が高く、将来にわたって学術的・産業的に重要なナノとバイオの融合領域「ナノバイオテクノロジー」および「生命化学」をターゲットに教育・研究を行います。本専攻が設置されているポートアイランドは、バイオ、食品、化粧品、医療、創薬関連の企業が集積した世界有数のバイオメディカルクラスターとして知られており、公的研究機関や企業、他大学との連携を通じて、研究・教育を展開します。

活躍の舞台はWorldWide

本専攻では化学や生物学といった基礎的な学問領域から、医療、創薬、材料科学などの応用技術領域まで幅広い分野の知識や技術を修得できます。研究成果は国内外のジャーナルへの投稿や国内外の学会での発表などにより積極的に発信すると同時に、研究者・技術者に求められるプレゼンテーションや英語コミュニケーションの能力についても緻密な教育を行い、世界を舞台に活躍できる人材の養成をめざします。

特色

■ ナノバイオの拠点

研究分野は生命化学、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、有機化学、錯体化学、高分子化学、発生学など、化学から生物・物理にまたがる幅広い分野にわたっており、個人の興味(研究分野)と指向性(基礎および応用)にあわせたプログラムによりナノバイオを総合的に学ぶとともに、一人ひとりに与えられたテーマに基づいて専門性の高い研究を行うことができます。

■ 成果を世界へ発信

研究成果は海外の一流ジャーナルへの投稿、国際学会、国内学会での発表などにより、社会へ発信します。

■ サイエンスライブチケット

定期的に国内外から講師を招き、最先端科学に関する講演を行います。世界の第一線で活躍する研究者とふれあうことができ、その考え方やプレゼンテーションの技術などを学ぶことができます。

■ ポリバレントな教育体制

研究指導は一人の学生に対して専門が異なる複数の教員が責任を持ち、ナノバイオサイエンスグループ、ナノサイエンスグループ、バイオサイエンスグループが連携して柔軟で最適な指導体制をとりますので、深い専門性と幅広いバックグラウンドを身につけることができます。

■ FIRSTクラスの研究環境

本専攻には最新の研究設備が備えられ、それらを利用した高度な研究を行うことができると同時に、測定技術、実験技術などを将来に活かせる応用技術を学ぶことができます。

■ アイランドシップ連携

ポートアイランドというバイオとナノの一大集積地に立地する利点を活かして、公的研究所や国内外の企業との連携をはかり、これを教育・研究に活用することで、他に類を見ない新しいシステムで学ぶことができます。

ナノバイオサイエンスグループ

修士課程

博士後期課程

生命分子の精巧な構造と優れた機能に倣うという理念のもと、生命現象を物理化学的側面から深く理解し分子レベルで解明していくとともに、その知見を医療、創薬、環境、情報など、さまざまな分野へ応用することをめざしている。例えば、核酸の高次構造と分子クラウディングなどの分子環境との相関について解明と応用を図ることで、ナノワイヤーやナノロジックゲートなど、将来のDNAコンピュータ開発に役立つ超微細材料の構築を行っている。さらに、生命を範とした高度な分子設計と有機合成を駆使し、ガン細胞検出、HIV治療、環境分析などに役立つ細胞内生理活性物質センサー、人工リボザイム、分子インプリント合成高分子などの創製に取り組んでいる。

生命分子化学

核酸化学、分子クラウディング

教授 杉本直己 (先端生命工学研究所 所長)

機能性高分子

生体機能性高分子、バイオセンサー

教授 松井 淳

バイオ分子機能

分子間相互作用、リボザイム、機能性核酸

教授 中野 修一

分子設計化学

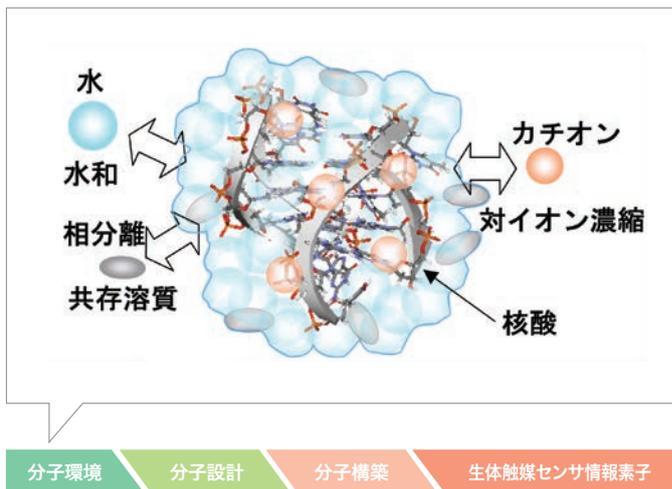
生体分子構造、生体分子素子、生体分子材料

教授 三好大輔

バイオ計測化学

ペプチド・タンパク質工学、細胞工学、タンパク質相互作用解析

准教授 白井 健二



ナノサイエンスグループ

修士課程

博士後期課程

ナノサイエンスグループでは、金属薄膜、有機分子、ナノ粒子、核酸、高分子およびそれらの複合体など、種々の新規ナノ構造材料の開発と高機能化に取り組んでいる。様々な有機化学反応を駆使して、環境・生体適合性を有する新しい機能性分子を設計・合成し、無機材料表面や生命分子の構造および物性を制御することを試みるとともに、金属・半導体粒子などのナノ材料と有機分子や生命分子を融合させ、複合化により発現する新しい物性を利用したデバイスの作製もを行っている。これらの研究により、未来のエレクトロニクス、ケミカルサイエンス、バイオテクノロジーに有用な機能性材料の創製をめざしている。

有機合成化学

有機分子と生命分子の相互作用、機能性分子の構造と物性

教授 村嶋 貴之

ナノ材料化学

金属ナノ粒子複合体の合成と機能制御、新規ナノデバイスの創製

教授 赤松 謙祐

生物有機化学

バイオメティクス、機能性分子のコンジュゲートによる生体機能制御

教授 甲元 一也

無機光化学

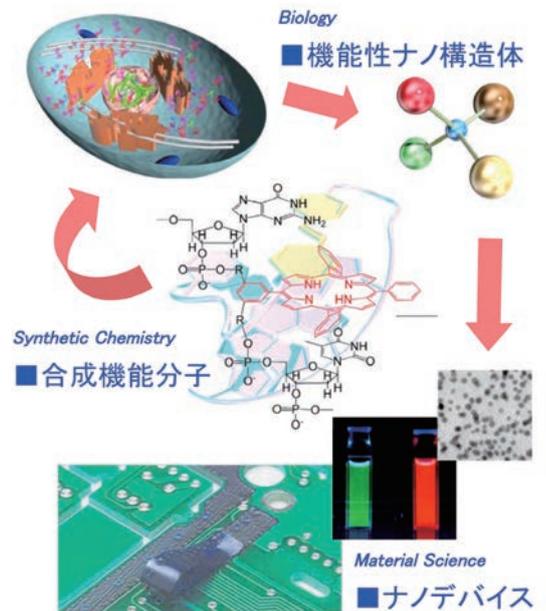
新規光学ナノ材料の創製、機能性ナノ材料の複合化と物性制御

准教授 鶴岡 孝章

機能システム化学

異種ナノ材料の精密複合化による新規機能システムの創製

講師 高嶋 洋平



バイオサイエンスグループ

修士課程

博士後期課程

バイオサイエンスグループでは、生物個体における細胞機能の発現に焦点を置き、幅広く研究を展開している。モデル生物としてホヤやゼブラフィッシュを用い、形態形成における調節メカニズムや神経管形成メカニズムを分子レベルで解明することをめざすほか、新規な機能性分子のスクリーニング系の開発を行う。またヒト培養細胞やマウスを用いて、腫瘍形成・転移メカニズムに関する研究も行い、治療への応用を目指す。生体機能モデルに関しては、非天然型の新規な機能性生体高分子の開発を行うほか、金属酵素の活性中心を化合物で模倣するバイオメティックケミストリーに関する研究を行う。また、アミロイド形成など疾病に関係する生体高分子間相互作用の解析も行い、生物の総合的理解をめざしている。

分子細胞発生学

脊椎動物の進化、細胞のストレス応答

教授 西方 敬人

遺伝子薬学

新規な機能性生体高分子の開発、遺伝子発現制御

教授 川上 純司

生物無機化学

生体機能模倣分子、金属錯体-ペプチドコンジュゲート合成

教授 藤井 敏司

生命高分子科学

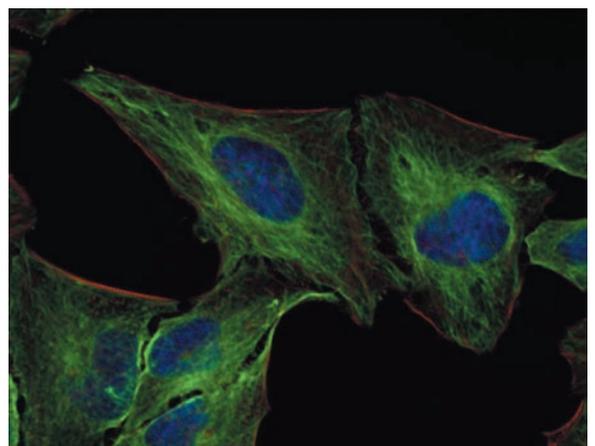
核酸医薬、バイオマテリアル、生分解性ナノ会合体

准教授 長濱 宏治

腫瘍分子生物学

癌化・癌悪性化のメカニズム、メカノバイオロジー

准教授 川内 敬子



支援体制 & 環境

Support System & Environment



研究所

■ 人間科学研究所

「現代人の心の危機」の研究を目的に設立された研究所です。平成10年～14年度、15年～19年度、文部科学省「学術フロンティア推進事業」（卓越した研究組織における共同プロジェクト）に採択され、研究成果として計7冊の甲南大学人間科学研究所叢書を発行しました（Phase1～2）。平成20年～24年度には文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択され、「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」をテーマとし、その成果として計4冊の叢書を発行しました（Phase3）。平成25年度からは「良きサヴァイヴアルに向けてーグローバル化のなかでの実践的ネットワークの構築」、平成26年度からは「地域での【癒やす力】【育てる力】を高める心理的・芸術的支援モデルの構築」に取り組みました（Phase4）。平成28年度からは研究実践プロジェクト「現代人の心の危機に関する共同研究～Phase5～：過去と向き合い、未来を創る」として、これまでの活動を発展的に整理統合し、臨床心理学を一つの核に置きながら、人文科学その他の分野や研究機関と連携して、危機の理解と実践のための知を総合的かつ先端的に追究する研究拠点を形成していきます。地域の市民、あるいは専門家に開かれた、臨床心理学関連の研究や、「子育て支援」「甲南アトリエ」「子どもの哲学」「心理臨床ワークショップ」や、兵庫県、神戸新聞社等と連携した「次世代育成」などの研究・実践を行っています。

■ カウンセリングセンター

カウンセリングセンター（18号館1階）には、「学生相談室」と「心理臨床カウンセリングルーム」が配置されています。学生相談室は、学生の修学、進路などをはじめ、さまざまな心理的問題に対して、カウンセリングを中心とした援助を行っています。また、「金曜Reアワー」や「ランチアワー」などグループ活動によって、こころの健康の増進をはかるとともに、自己理解やコミュニケーション力の育成を行っています。心理臨床カウンセリングルームは、臨床心理士養成大学院第一種指定校の実習施設として設けられ、一般の方々に対象に、有料で心理療法を提供しています。最初の面接は、臨床心理士の資格をもつルーム相談員が受けますが、その後は、主にルーム研修員である大学院生が、指導教員の監督のもとに心理療法を行います。また、子育て支援や高齢者支援などの地域支援活動も行っています（臨床心理士養成大学院の入学者の募集は行っていません）。

■ フロンティア研究推進機構（甲南FRONT）

〈Konan University Frontier Research Organization for New Themes〉

甲南大学の知的シーズを社会へ還元することを目的として設立された機構です。その業務は、(1)科学研究費などの競争的資金獲得や受託研究・共同研究などの受け入れを行う研究支援、(2)研究会・講演会・交流会などを開き、産官学のマッチング業務を担当するコーディネート、(3)特許など知的財産の創出・管理・活用です。「甲南大学産官学連携ポリシー」、「甲南大学発明規程」および「甲南大学知的財産ポリシー」のもとに大学の研究成果や知的創造物を通しての産官学連携をめざしています。

■ ビジネス・イノベーション研究所

ビジネス・イノベーション研究所は、国・省庁、地方公共団体、企業、NPO、NGO、関係団体および国内外の研究機関との社会連携を通じて、21世紀型ビジネスモデルを開発することを目的としています。本研究所は京阪神地域における大企業だけでなく、伝統的な中小企業やベンチャー企業、ファミリー企業、さらにはNPO、NGOなどの新しい事業体の活性化、および経営者の人材育成を目指しています。このように本研究所は、地域企業や関係団体とのネットワークを形成して、地域社会、そしてアジアを中心としてグローバルに社会発展に寄与していきます。

■ 総合研究所

総合研究所は、これまでの科学の既成の枠組みにとらわれず、新しい発想に基づき、学部・学科の壁を乗り越え共同研究チームを組織し、2年間の研究活動を行い、その成果を「研究叢書」として発信しています。2015年4月にスタートしたKONANプレミアプロジェクト「海でつながる甲南大学・堺市」が「関西湾岸ネットワークの構築」に発展したことを受け、2017年度には同ネットワークの構築（広域の地域連携）の指定研究テーマをスタートさせました。

また、総合研究所の研究成果を地域の方々向けに、毎年前期・後期に各一回、公開講演会を開催しています。

■ 先端生命工学研究所 (FIBER)

(Frontier Institute for Biomolecular Engineering Research)

生命・健康・環境・材料の4領域を束ねて「ひと」を科学することをテーマに、生命分子工学分野において高度で先端的な研究・教育を実施するため、2003年11月に設立されました。

文部科学省の「学術フロンティア推進事業」(2004-2008年度)、「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」(2009-2013年度、および2014-2018年度)、科学研究費助成事業における新学術領域研究「分子夾雑の生命化学(2017-2021年度)」の採択を受けるなど、研究活動を発展させてまいりました。2009年4月にはポートアイランドキャンパスを神戸医療産業都市第2地区に開設し、本研究所も同地に移転しました。これまでに国際的に著名な学術雑誌の表紙を飾る研究成果を数多く発信しています。また、兵庫県及び神戸市が主導するひょうご神戸サイエンスクラスター協議会と共催で一般公開学術講演会「FIBER FUTURE COLLEGE(FIBER未来大学)」シリーズを定期的で開催するなど、生命化学・核酸化学分野における世界最高水準の社会に開かれた研究拠点として、研究活動を推進しています。



■ ティーチング・アシスタント

本学では、ティーチング・アシスタント制度を設けています。これは大学院生が学部における授業、実験・実習に携わり、学部学生に対する教育効果を高めるための制度です。大学院生の生活を支援するとともに、研究者としての自覚を高めることにもつながるものです。

■ 連携客員教授

本学は、連携客員教授制度を導入しています。国・公・私立の大学院・研究機関の教員または研究者を連携客員教授として招へいし、本学大学院生の研究指導を行っています。

■ 学会発表補助・複写費補助

近年、大学院生が学会で研究発表、シンポジウム・ワークショップの講師、研究発表に対するコメンテータを務めることが多くなっています。大学院生の研究成果を発表するために、本学では1名につき年間、交通費・宿泊費・学会参加費として42,500円を限度に補助しています。

また、文献をコピーすることが研究上必要であることを考慮し、複写費として1名につき13,000円を限度に補助しています。

※長期履修の学生の場合は、金額が異なります。

■ 情報環境

パソコン教室に設置してあるパソコンには、標準的なオフィスソフトウェアの他に、Mathematica、MATLABなどの数値計算/シミュレーションソフト、SPSSなどの統計解析ソフトなど、研究に有用な応用ソフトウェアがインストールされています。

キャンパス内では、無線LANを用いて、各自のパソコンを学内ネットワークやインターネットに接続することで、より効率的に研究活動を行うことができます(接続については情報システム室でサポートしています)。在学中は、Microsoft® 社が提供するOffice365サービスが利用でき、大学のメールアドレスが付与されるほか、無償で各自のパソコンに最新版のオフィスソフトウェアをインストールすることができます。

■ 図書館・雑誌館・サイバーライブラリ

岡本キャンパスは、図書館を中心に、雑誌館とサイバーライブラリの3つの図書館施設を擁しています。大学全体の蔵書数約110万冊のうち、その約半数にあたる55万冊を図書館に収蔵しています。

図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置する地上4階、地下1階建てのレンガ造りの建物です。学修・研究に必要な図書を中心に、雑誌、新聞、視聴覚資料のほか、現代小説や実用書なども収集・提供しています。電子情報として、50数種類のデータベースや電子書籍・電子ジャーナルを導入し、情報検索コーナーやPCルームの設置、館内に無線LANを整備してノートパソコンの貸出を行うなど、高度情報化社会に対応した学修環境を提供しています。また、ヘルプデスク(レファレンス・相互利用カウンター)を設けたり、データベースのガイダンスを実施するなど、利用者の情報探索を支援しています。

雑誌館は、5号館地階にあり、約1万タイトルの和洋学術雑誌や、その他の逐次刊行物を集中的に収蔵しています。サイバーライブラリは、5号館3階にあり、学修用図書を中心とした配架と、無線LAN環境、ノートパソコンや大型ディスプレイの貸出を行っています。また、プレゼンテーションやグループワークのための「共同学修エリア」、静かに学びたい方向けの「独学エリア」などの学修スペースも提供しています。サイバーライブラリは、日曜・祝日も開室しています。

また、ポートアイランドキャンパスにも図書室があり、専門図書を中心に約1万冊を蔵書しています。



図書館



サイバーライブラリ



雑誌館

資格取得
(教育職員免許状)

■ 教職教育センター

本学の大学院には、高度な専門的知識を身につけ、中学校や高等学校の教員をめざす人のために、次表のとおり中学校教諭専修免許状および高等学校教諭専修免許状が取得できる教職課程が設けられています。なお、取得しようとする免許教科の中学校・高等学校の一種免許状を取得しているか、同時に取得することが前提となります。

教職教育センターでは、教員採用試験に向けての対策講座・実践講座の開講、講演会の開催、各種情報の提供や、関連図書の閲覧・貸出などの支援をしています。

■ 大学院(修士課程)の認定課程

研究科	専攻	免許教科	免許状の種類
人文科学研究科	日本語日本文学専攻	国語	中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状
	英語英米文学専攻	英語	中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状
	応用社会学専攻	社会	中学校教諭専修免許状
		地理歴史／公民	高等学校教諭専修免許状
人間科学専攻	社会	中学校教諭専修免許状	
	公民	高等学校教諭専修免許状	
自然科学研究科	物理学専攻・化学専攻・生物学専攻	理科	中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状
	知能情報学専攻	数学	中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状
社会科学研究科	経済学専攻・経営学専攻	社会	中学校教諭専修免許状
		公民	高等学校教諭専修免許状
フロンティアサイエンス研究科	生命化学専攻	理科	中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状

学位授与
状況
(2019年3月31日現在)

修士課程

研究科	専攻	学位	人数
人文科学	日本語日本文学	修士(文学)	474名
	英語英米文学		
	人間科学	修士(社会学)	198名
	応用社会学		
自然科学	物理学	修士(理学)	1,114名
	化学		
	生物学	修士(理学)	93名
	情報システム工学 (2013年度まで)		
	知能情報学	修士(工学)	60名
		修士(理学)	4名
	修士(工学)	39名	
社会科学	経済学	修士(経済学)	129名
	経営学	修士(経営学)	240名
	法学(2005年度まで)	修士(法学)	94名
	会計専門職(2015年度まで)	会計修士(専門職)	12名
フロンティアサイエンス	生命化学	修士(理工学)	95名
合計			2,552名

博士後期課程

研究科	専攻	学位	人数	
人文科学	日本語日本文学	課程博士	7名	
	英語英米文学			
	人間科学	論文博士	7名	
	応用社会学	課程博士	6名	
		博士(社会学)	論文博士	9名
自然科学	物理学	課程博士	73名	
	生命・機能科学	博士(理学)	論文博士	23名
	情報システム工学 (2013年度まで)	課程博士	6名	
		博士(理学)	論文博士	3名
		課程博士	1名	
		博士(工学)	論文博士	1名
	知能情報学	博士(情報学)	課程博士	1名
社会科学	経営学	博士(経営学)	課程博士	8名
			論文博士	1名
フロンティアサイエンス	生命化学	博士(理工学)	課程博士	8名
			論文博士	2名
合計			156名	

専門職大学院

法科大学院	法学研究科	法務	法務博士(専門職)	438名
会計大学院	ビジネス研究科	会計	会計修士(専門職)	184名
合計				622名

大学院生の 主な就職先

■ 人文科学研究科

■日本語日本文学専攻

大阪府教育委員会、兵庫県教育委員会、奈良県教育委員会、静岡県教育委員会、神戸市教育委員会、関西外国語大学、甲南大学、私立中学・高等学校、台中YMCA(台湾)、櫻花日語学園(台湾)、兵庫県信用農業協同組合連合会

■英語英米文学専攻

大阪府教育委員会、兵庫県教育委員会、奈良県教育委員会、関西外国語大学、関西大学、北九州大学、近畿大学、京都外国語大学、甲南大学、鳥根大学、中京大学、帝塚山学院大学、桃山学院大学、龍谷大学、宮崎公立大学、福岡工業大学、九州国際大学、大手前大学、SMBC日興証券株式会社、株式会社創造学園

■応用社会学専攻

京都大学、神戸大学、広島大学、鳥根大学、北海道大学、奈良県立大学、甲南大学、関西大学、立命館大学、龍谷大学、大手前大学、千里金蘭大学、宮城学院女子大学、流通経済大学、関西国際大学、熊本学園大学、神戸山手大学、国立教員政策研究所、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、奈良県庁、兵庫県庁、新潟県立歴史博物館、関西学院大学図書館

■人間科学専攻

大阪府・大阪市・茨木市・八幡市・堺市の各職員、甲南大学、神戸女子大学、神戸女学院大学、宝塚市教育委員会、大阪府公立学校教員、佛教大学、京都学園大学、鳥根大学、群馬大学、鹿島建設、コベルコ科研

■ 自然科学研究科

■物理学専攻

東芝機械、富士電機ホールディングス、エルピーダメモリー、島津製作所、ローム、THK、ジェイテクト、ニチコン、アルバック、京セラミタ、日本電産、スタンレー、NTTネオメイト、パナソニックディスクリットセミコンダクター、富士通アドバンストエンジニアリング、三菱マイコン機器ソフトウエア、NECネットエスアイ、みずほ証券、大阪府警、日立ソリューションズ・ネクサス、コベルコ科研、富士通、シャープ、矢崎総業、ミネベアミツミ、グローリー

■化学専攻

三菱電機、日本ハム食品、シーアイ化成、上野製薬、戸田工業、パナソニック、大和ハウス工業、ファインセンター、(株)MORESCO、(株)ラ・マッセ、甲南大学大学院、松尾電機、日本山村硝子、タイガー魔法瓶、白石中央研究所、シマノ、コベルコ科研、日本食品エコロジ研究所、スタープラスチック工業、ニフコ、堀場テクノサービス、新コスモス電機、大塚製薬、矢崎総業、ローム、日産化学、住友ベークライト、朝日インテック、荒川化学工業、初田製作所、日本マルコー

■生物学専攻

兵庫県教育委員会(中学校教諭・高等学校教諭)、大阪市教育委員

会、アースバイオケミカル、アストラゼネカ、MICメディカル、グリコ栄養食品、塩野義製薬、シミック、新日本科学、大鵬薬品工業、日本新薬、パレクセル・インターナショナル、山崎製パン、ピオフェルミン製薬、ミツワフロンテック、アポットジャパン(株)、甲南大学(研究員)、Sheffield大学(イギリス)、プリティッシュコロンビア大学(カナダ)、日本郵便、鳥居薬品

■知能情報学専攻

シグマトロン、1stホールディングス、大王電機、三井造船システム技研、CSI、大阪府教育委員会、エヌジェーケー、関電システムソリューションズ、ヤフー、ネクスト、NTT西日本、ソフトバンク、グローリー

■生命・機能科学専攻

JST・ERATO・北川統合細孔プロジェクト、ウプサラ大学(スウェーデン)、甲南大学、首都大学東京、ジュネーブ大学(スイス)、福井県立大学、日本学術振興会特別研究員、サントリー生物有機化学研究所、IST、日本レーザ電子、ファイン、リガク、新日鐵化学、カリフォルニア大学、製品評価技術基盤機構、日本水産、大阪府立環境農林水産研究所

■ 社会科学研究科

■経済学専攻

妹尾公認会計士事務所(ひょうご税理士法人)、辻総合会計事務所、禅定税理士事務所、峯島英行税理士事務所、鶴岡税理士事務所、KPMG税理士法人ほか

■経営学専攻

青山学院大学、大阪国際大学、関西学院大学、京都産業大学、甲南大学、専修大学、大阪府庁、大阪市役所、神戸市役所、国税専門官、オリックス、大和リース、ソニー、竹中工務店、タナベ経営、日立造船、ビクターエンタテインメント、みずほ証券、阪急阪神百貨店

■ フロンティアサイエンス研究科

■生命化学専攻

カネカ、大阪ソーダ、シスメックス、大倉工業、JCU(荏原ユーージライト)、ハリマ化成グループ、阪神内燃機工業、上村工業、石原薬品(石原ケミカル)、フジプレアム、兵庫県教育委員会、アンズコーポレーション、キンダ化学、桐灰化学、クラブコスメテックス、サカエ、シオノギ分析センター、積水水口化工、アークレイ、アストラゼネカ、I.S.T、オージー、加美乃素本舗、全星薬品工業、扇雀鉛本舗、日新薬品工業、尾池工業、オリエンタル鍍金、ハニージャパン、ファイン、アスカカンパニー、一方社油脂工業、ニッセン化粧品評価センター、山田養蜂場、田村薬品工業、タカラベルモント、ディーエスピーリサーチ、花王、福田金属箔粉工業、パレクセル・インターナショナル

学費・諸費

2020年度入学者の学費(年額)は、下表のとおりです。

(単位:円)

研究科		入学金	授業料	研究実験費	心理特別実習費	計
人文科学	日本語日本文学専攻	300,000	617,000	—	—	917,000
	英語英米文学専攻	300,000	617,000	—	—	917,000
	応用社会学専攻	300,000	617,000	—	—	917,000
	人間科学専攻 (環境・芸術・思想専修)	300,000	617,000	—	—	917,000
	人間科学専攻(心理臨床専修)	300,000	617,000	—	50,000	967,000
自然科学	300,000	803,000	145,000	—	1,248,000	
社会科学	300,000	617,000	—	—	917,000	
フロンティアサイエンス	300,000	803,000	145,000	—	1,248,000	

(注)甲南大学卒業後、本大学院に入学する者は、その入学金を半額免除します。

本大学院修士課程修了と同時に博士後期課程に入学する者は、その入学金を全額免除します。

奨学金・その他の支援制度

甲南大学では、経済的諸事情により修学が困難とされる大学院生を対象として、各種の奨学金制度を設けています。また、不測の事態により学費の納入が困難になった大学院生への「学費延納制度」も設けられており、経済的な心配にとらわれることなく研究に励めるようサポートしています。

また、その他の支援としては、外国留学制度による留学支援や語学教育に関する支援も行っています。

■ 奨学金制度

奨学金制度には、返還義務のない「給付制」と、返還義務のある「貸与制」の2種類があり、奨学金の種類によって、金額や出願資格、返還方法などが異なります。

(2020年度予定)

	奨学会(金)名	対 象	期 間	金 額(円)	返還方法	出願資格	出 願
給付制	甲南学園奨学金	修士・博士後期	2年を限度	(月額)30,000	—	人物・学業ともに特に優れ、奨学金の給付が必要な者	4月
貸与制	日本学生支援機構 大学院奨学金	修士	標準修業年限	◆第一種(無利子) (月額) 50,000、88,000 から選択 ◆第二種(有利子) 50,000、80,000、 100,000、130,000、 150,000 から選択	6カ月据え置き、 貸与総額に応じて、1年～20年 以内に返還	修学の継続に奨学金が必要な者 (標準修業年限を超えていないこと)	4月
		博士後期		◆第一種(無利子) (月額) 80,000、122,000 から選択 ◆第二種(有利子) (月額) 50,000、80,000 100,000、130,000、 150,000 から選択			

※奨学金の募集内容は変更する場合があります。

■ 一般教育訓練給付制度 厚生労働大臣指定講座

社会科学部経済学専攻・経営学専攻(修士課程のみ)は、厚生労働大臣指定一般教育訓練講座に指定されています。一定の条件を満たす雇用保険の被保険者(在職者)または被保険者であった方(離職者)が受講し修了した場合、受講者本人が一般教育訓練施設に支払った教育訓練経費の2割に相当する額(上限10万円)を公共職業安定所(ハローワーク)へ申請することにより支給されます(詳細は、厚生労働省のホームページをご覧ください)。

※被保険者とは、一般被保険者及び高年齢被保険者をいいます。

■ 長期履修制度

職業を有しているなどの事情により、大学院の課程に規定されている標準修業年限(修士課程2年、博士後期課程3年)を超えて一定の期間にわたり、計画的に教育課程を履修することができる長期履修制度を設けています(社会科学部経済学専攻(税理コース)を除く)。

2020年度大学院入学試験について

1. 入試制度・日程一覧

入試情報の詳細は各入学試験要項「大学院入学試験要項」「大学院学内推薦・学内選考入学試験要項」「大学院外国人入学試験要項」「大学院AO入学試験要項」を確認してください。

(修士課程)

(1) 入試制度一覧

研究科	専 攻		入学定員	募集区分								
				一般	社会人	一般	社会人	学内推薦 学内選考		外国人	AO	
				1次募集		2次募集		1次募集	2次募集			
人文科学研究科	日本語日本文学	専門探究コース	5名								○	—
		多元教養コース									○	—
	英語英米文学	専門探究コース	6名								○	—
		多元教養コース									○	—
	応用社会学	専門探究コース	5名	○	○	○	○	○	—		○	—
		多元教養コース									○	—
人間科学	環境・芸術・思想専修	専門探究コース	2名								○	—
		多元教養コース									○	—
	心理臨床専修		8名							—	—	
自然科学研究科	物理学		12名					○	—			—
	化学		12名	○	○	○	○	○	—		○	—
	生物学		5名					—	—			—
	知能情報学		6名					○	○			—
社会科学研究科	経済学	研究コース	10名	○	○	○	○	○	○	—	—	—
		税理コース		○	—	○	—	○	○	—	—	—
	経営学	経営学コース	10名	○	—	○	—	○	○	—	—	○
		ビジネスコース		—	○	—	○	—	—	—	—	○
フロンティアサイエンス研究科	生命化学		10名	○	○	○	○	○	○	○	—	

注1) 入学定員は、一般、社会人、学内推薦・学内選考、外国人、AOを合わせたものです。選考の結果によっては、合格者が入学定員に達しない場合があります。

注2) 1次募集の結果、入学手続者数が入学定員に達した場合は、2次募集を実施しない場合があります。2次募集の実施については、11月上旬に大学院入試情報サイトでお知らせします。

注3) 社会科学研究科経営学専攻において、「一般」で出願する場合は経営学コースに、「社会人」で出願する場合はビジネスコースになります。

注4) 社会科学研究科経営学専攻を志願する場合は、希望する科目(演習テーマ)が開講されているかどうか、出願前に必ず経営学専攻に問い合わせてください。

注5) 入学にあたり在留資格「留学」を必要とする場合は、在留資格申請手続きの期間を考慮し、できるだけ1次募集で出願してください。

2次募集で出願する場合は、出願以前にアドミッションセンターに相談してください。

(2) 入試日程一覧

①一般・社会人

募集区分	出願期間		試験日	合格発表
	開始日	終了日		
1次募集	7月29日(月)	8月5日(月)	9月7日(土)	9月13日(金)
2次募集	1月15日(水)	1月24日(金)	2月15日(土)	2月21日(金)

②学内推薦・選考

研究科	専 攻	出願期間		試験日	合格発表
		開始日	終了日		
自然科学研究科	物理学 化学 知能情報学(1次)	5月7日(火)	5月14日(火)	書類選考	5月24日(金)
フロンティアサイエンス研究科	生命化学(学内推薦)				
人文科学研究科	日本語日本文学 英語英米文学 応用社会学 人間科学	6月10日(月)	6月17日(月)	6月29日(土)	7月5日(金)
社会科学研究科	経済学(1次) 経営学(1次)				
自然科学研究科	知能情報学(2次)				
社会科学研究科	経済学(2次) 経営学(2次)	10月8日(火)	10月15日(火)	10月26日(土)	11月1日(金)
フロンティアサイエンス研究科	生命化学(学内選考)	1月15日(水)	1月24日(金)	2月15日(土)	2月21日(金)

③外国人

出願期間		試験日	合格発表
開始日	終了日		
7月22日(月)	7月29日(月)	9月7日(土)	9月13日(金)

④AO

募集区分	出願期間		試験日	合格発表
	開始日	終了日		
9月	7月29日(月)	8月5日(月)	9月7日(土)	9月13日(金)
2月	1月15日(水)	1月24日(金)	2月15日(土)	2月21日(金)
3月	2月18日(火)	2月21日(金)	3月7日(土)	3月13日(金)

(博士後期課程)

(1)入試制度一覧

研究科	専攻	入学定員	募集区分		
			一般入試	社会人入試	外国人
人文科学研究科	日本語日本文学	2名	○	—	○
	英語英米文学	3名			
	応用社会学	2名			
	人間科学	3名			
自然科学研究科	物理学	3名	○	○	○
	生命・機能科学	3名			
	知能情報学	2名			
社会科学研究科	経営学	3名	○	○	—
フロンティアサイエンス研究科	生命化学	1名	○	○	○

注1)入学定員は一般、社会人、外国人を合わせたものです。

注2)選考の結果によっては、合格者が入学定員に達しない場合もあります。

注3)社会科学研究科経営学専攻を志願する場合は、希望する科目(演習テーマ)が開講されているかどうか、出願前に必ず経営学専攻に問い合わせてください。

注4)入学にあたり在留資格「留学」を必要とする場合は、出願以前にアドミッションセンターに相談してください。

(2)入試日程一覧

①一般・社会人

出願期間		試験日	合格発表
開始日	終了日		
1月15日(水)	1月24日(金)	2月15日(土)・16日(日)	2月21日(金)

②外国人

出願期間		試験日	合格発表
開始日	終了日		
7月22日(月)	7月29日(月)	9月7日(土)	9月13日(金)

注)試験日のうち、2月15日(土)は人文科学研究科、社会科学研究科、2月16日(日)は自然科学研究科、フロンティアサイエンス研究科が試験を実施します。

2. 入学検定料

1 出願あたりの入学検定料は35,000円になります。

2019年度

入学試験
結果
(修士課程・博士課程)

課程	研究科	専攻	入学定員	一般		社会人		学内推薦・学内選考		外国人		A O				合計							
				1次募集	2次募集	1次募集	2次募集	1次募集	2次募集	1次募集	2次募集	2月入試	3月入試	3月入試	3月入試	志願	合格						
				志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格				
修士	人文科学	日本語日本文学	専門探究コース	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
			多元教養コース	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
		英語英米文学	専門探究コース	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
			多元教養コース	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
		応用社会学	専門探究コース	5	2	1	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3		
			多元教養コース	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
		人間科学	環境・芸術・思想専修 専門探究コース	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
			多元教養コース	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
		心理臨床専修	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	小計	26	3	1	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	4			
	自然科学	物理学	12	13	8	7	5	0	0	0	0	4	4	—	—	0	0	—	—	—	—	24	17
		化学	12	5	5	0	0	0	0	0	0	6	6	—	—	0	0	—	—	—	—	11	11
		生物学	5	10	9	1	1	0	0	0	0	—	—	—	—	0	0	—	—	—	—	11	10
		知能情報学	6	5	3	2	1	0	0	2	0	5	5	—	—	0	0	—	—	—	—	14	9
小計		35	33	25	10	7	0	0	2	0	15	15	—	—	0	0	—	—	—	—	60	47	
社会科学	経済学	研究コース	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		税理コース	4	4	3	2	2	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5
	経営学	経営学コース	10	0	0	0	0	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ビジネスコース	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	1	1	1	1
	小計	20	4	3	2	2	0	0	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	0	1	1	7	6
フロンティアサイエンス	生命化学	10	5	4	0	0	0	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	9	
合計	91	45	33	16	12	0	0	2	0	20	20	0	0	0	0	0	0	0	1	1	84	66	

課程	研究科	専攻	入学定員	一般		社会人		外国人		合計		
				志願	合格	志願	合格	志願	合格	志願	合格	
博士後期	人文科学	日本語日本文学	2	0	0	—	—	0	0	0	0	
		英語英米文学	3	0	0	—	—	0	0	0	0	
		応用社会学	2	0	0	—	—	0	0	0	0	
		人間科学	環境・芸術・思想専修	3	0	0	—	—	0	0	0	0
			心理臨床専修	1	1	—	—	—	—	—	—	1
	小計	10	1	1	—	—	0	0	0	1	1	
自然科学	物理学	3	0	0	0	0	0	0	0	0		
	生命・機能科学	3	0	0	0	0	0	0	0	0		
	知能情報学	2	0	0	0	0	0	0	0	0		
	小計	8	0	0	0	0	0	0	0	0		
社会科学	経営学	3	0	0	3	3	—	—	3	3		
フロンティアサイエンス	生命化学	1	2	2	0	0	0	0	2	2		
合計	22	3	3	3	3	0	0	6	6			

大学・大学院のあゆみ

- | | | |
|----|------|--|
| 旧制 | 1918 | <input type="checkbox"/> 財団法人甲南学園私立甲南中学校設立認可 |
| | 1919 | <input type="checkbox"/> 甲南中学校開校 |
| | 1923 | <input type="checkbox"/> 7年制甲南高等学校開校 |
| 新制 | 1948 | <input type="checkbox"/> 新制甲南高等学校に移行 |
| | 1951 | <input type="checkbox"/> 甲南大学設置認可 甲南大学開学 文学部設置
<input type="checkbox"/> 甲南大学第1回入学式挙行 |
| | 1952 | <input type="checkbox"/> 経済学部経済学科増設 |
| | 1957 | <input type="checkbox"/> 文学部:国文学科、英文学科、社会学科増設
<input type="checkbox"/> 理学部:物理学科、化学科、生物学科増設
<input type="checkbox"/> 文理学部廃止 |
| | 1959 | <input type="checkbox"/> 理学部経営理学科増設 |
| | 1960 | <input type="checkbox"/> 法学部法学科増設 経営学部経営学科増設
-文・理・経済・法・経営の5学部となる- |
| | 1962 | <input type="checkbox"/> 理学部応用物理学科、応用化学科増設 |
| | 1964 | <input type="checkbox"/> 理学部応用数学科増設
<input type="checkbox"/> 甲南大学大学院開設
<input type="checkbox"/> 人文科学研究科(修士課程)
国文学専攻、英文学専攻、応用社会学専攻
<input type="checkbox"/> 自然科学研究科(修士課程)
物理学専攻、化学専攻、生物学専攻
<input type="checkbox"/> 人文科学研究科(博士課程)英文学専攻
<input type="checkbox"/> 自然科学研究科(博士課程)物理学専攻 |
| | 1965 | <input type="checkbox"/> 大学院社会科学研究科(修士課程)経済学専攻、
法学専攻、経営学専攻増設 |
| | 1970 | <input type="checkbox"/> 文学部ドイツ文学科増設 |
| | 1971 | <input type="checkbox"/> 大学院人文科学研究科(博士課程)国文学専攻、
応用社会学専攻増設
<input type="checkbox"/> 社会科学研究科(博士課程)経営学専攻増設 |
| | 1990 | <input type="checkbox"/> 大学院自然科学研究科(博士後期課程)生命・機能科学専攻増設 |
| | 1993 | <input type="checkbox"/> 大学院自然科学研究科(修士課程)情報・システム科学専攻増設
<input type="checkbox"/> 文学部ドイツ文学科廃止
<input type="checkbox"/> 法学部経営法学科増設 |
| | 1994 | <input type="checkbox"/> 大学院自然科学研究科(博士後期課程)情報・システム科学専攻増設 |
| | 1995 | <input type="checkbox"/> 文学部国文学科を日本語日本文学科に、英文学科を英語英米文学科に名称変更
<input type="checkbox"/> 大学院人文科学研究科の国文学専攻を日本語日本文学専攻に、
英文学専攻を英語英米文学専攻に名称変更 |
| | 1996 | <input type="checkbox"/> 文学部人間科学科増設 |
| | 1999 | <input type="checkbox"/> 大学院人文科学研究科(修士課程)人間科学専攻増設
<input type="checkbox"/> 学園創立80周年記念式典挙行 |
| | 2001 | <input type="checkbox"/> 文学部歴史文化化学科増設
<input type="checkbox"/> 理学部を理工学部に変更し、学科を物理学科、生物学科、機能分子化学科、
情報システム工学科の4学科に改編
<input type="checkbox"/> 大学院人文科学研究科(博士後期課程)人間科学専攻増設
<input type="checkbox"/> 大学開学50周年記念式典挙行 |
| | 2002 | <input type="checkbox"/> 経済学部・経営学部EBA総合コースを開設
<input type="checkbox"/> 大学院社会科学研究科(修士課程)経営学専攻にビジネス(夜間主)コースを開設 |
| | 2004 | <input type="checkbox"/> 法科大学院開設 |
| | 2005 | <input type="checkbox"/> 大学院自然科学研究科の情報・システム科学専攻を情報システム工学専攻に名称変更
<input type="checkbox"/> ビジネス・イノベーション研究所開設
<input type="checkbox"/> 教職教育センター開設 |
| | 2006 | <input type="checkbox"/> 会計大学院開設
<input type="checkbox"/> 企業法務研究所開設 |
| | 2008 | <input type="checkbox"/> 知能情報学部 知能情報学科増設 |
| | 2009 | <input type="checkbox"/> 西宮キャンパスを新設
<input type="checkbox"/> マネジメント創造学部マネジメント創造学科増設
<input type="checkbox"/> 神戸ポートアイランドキャンパスを新設
<input type="checkbox"/> フロンティアサイエンス学部生命化学科増設
<input type="checkbox"/> 大学院フロンティアサイエンス研究科(修士課程、博士後期課程)生命化学専攻増設
<input type="checkbox"/> 学園創立90周年記念式典挙行 |
| | 2010 | <input type="checkbox"/> 法学部経営法学科廃止 |
| | 2011 | <input type="checkbox"/> 大学開学60周年記念式典挙行 |
| | 2012 | <input type="checkbox"/> 大学院自然科学研究科の情報システム工学専攻を知能情報学専攻に名称変更 |
| | 2013 | <input type="checkbox"/> 大学院(専門職)ビジネス研究科会計専攻を社会科学研究科会計専門職専攻に名称変更 |
| | 2015 | <input type="checkbox"/> 理工学部情報システム工学科を廃止 |
| | 2016 | <input type="checkbox"/> 社会科学研究科会計専門職専攻を廃止
<input type="checkbox"/> 白川台キャンパスを新設 |
| | 2017 | <input type="checkbox"/> KONAN INFINITY COMMONS(愛称:iCommons)開設 |
| | 2018 | <input type="checkbox"/> 公認心理師養成センター開設
<input type="checkbox"/> 法学研究科法務専攻(法科大学院)を募集停止 |

甲南学園の創立

甲南学園の創立は、関西の実業家たちが、自ら志を実現すべく創設した甲南幼稚園・小学校に発しています。創立者平生鈞三郎が掲げた「人格の修養・個性の尊重」を教育理念とし、1919(大正8)年に甲南中学校を開校、1923(大正12)年には、7年制の高等学校へと発展させました。



学園創立者

平生 鈞三郎
(ひらお はちさぶろう)

平生鈞三郎は武門の家に生まれ、東京海上火災保険をはじめとする損害保険業界の近代化に貢献、川崎造船所を再建するなど実業界で広く活躍しました。甲南病院の設立など社会事業にも関わりが深く、政界においては、広田内閣の文部大臣として義務教育の年限延長、師範教育の改善を提唱しました。教育者として、「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重し、各人の天賦の才能を引き出す」という教育理念を掲げ、甲南中学校さらに7年制の甲南高等学校を創設しました。

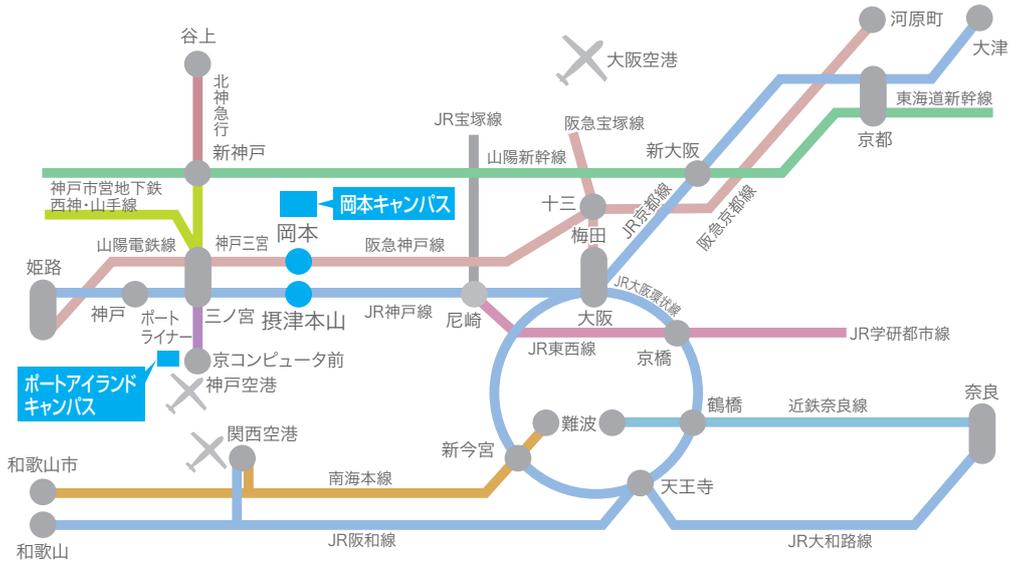


甲南大学発足

戦後の教育改革の中、1951(昭和26)年に甲南大学を開学しました。常に時代の要請に応える総合大学として、高水準の教育レベルを維持しています。そして、「個性尊重」の基本理念をさらに発展させ、「自発的研究の奨励」「国際人の育成」を実現する教育の場をめざします。

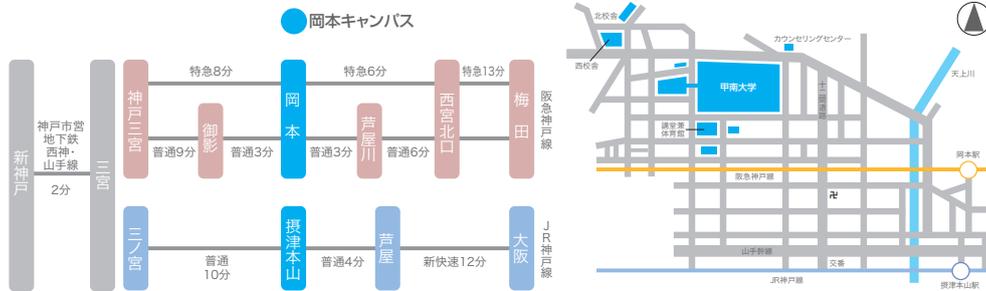


甲南大学アクセスガイド



岡本キャンパス

〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 JR神戸線摂津本山駅より徒歩約12分 / 阪急神戸線岡本駅より徒歩約10分



ポートアイランドキャンパス

〒650-0047 神戸市中央区港島南町7-1-20 ポートライナー京コンピュータ前駅より徒歩約4分



大学院情報

甲南大学大学院に関する情報は、甲南大学HPで確認してください。

■研究科：<http://www.konan-u.ac.jp/faculty/>

■入学試験：<http://www.konan-u.ac.jp/exam/graduate>

研究科



入学試験



各種お問合せ

■研究科

(人文科学研究科) 文学部事務室

電話：078-435-2755 e-mail：bun@adm.konan-u.ac.jp

(自然科学研究科)

理工学部・知能情報学部事務室

電話：078-435-2756 e-mail：rikou@adm.konan-u.ac.jp

(社会科学研究科)

経済・法・経営学部合同事務室

・経済学専攻担当

電話：078-435-2758 e-mail：keizai@adm.konan-u.ac.jp

・経営学専攻担当

電話：078-435-2441 e-mail：ei@adm.konan-u.ac.jp

(フロンティアサイエンス研究科)

ポートアイランドキャンパス事務室

電話：078-303-1457 e-mail：first@adm.konan-u.ac.jp

■入学試験

電話：078-435-2319 e-mail：ao@adm.konan-u.ac.jp



個性を力へ。

甲南大学アドミッションセンター 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9-1 TEL.(078)435-2319(直通) FAX.(078)431-2908
<http://www.konan-u.ac.jp>